

常山紀談

拾遺三四

135
15
116

東 京 圖 書 館

五 冊	二 六 一 號	五 二 架	三 五 函	雜 史 類	和 書 門
--------	------------------	-------------	-------------	-------------	-------------

常山紀談拾遺卷之三目次

- 一 相圖の旗とつゝ事
- 一 武田信玄相圖の旗を用ひる事
- 一 保科彈正信州高遠と籠城の事
- 一 上杉景勝寂上義元と合戦の事
- 一 美濃大垣より八月廿四日より九月四日まで鑄砲迫合の事
- 一 甲州山縣同心長坂重左衛門の事
- 一 信玄小田原發向の恥根來法師一番槍の事
- 一 輝政公岐阜攻具吹右衛門の事
- 一 朝鮮陣の恥兵器を塗馬糞して乾く事
- 一 松永彈正久秀が馬の事

一輝政公關ヶ原行軍順見の事

一 大河を渉る心得の事

一 大阪陣の取利隆武者奉行の事

一 同役池田の諸士頗當ふた事

一 曹の頭心得の事

一 上杉謙信馬印の事

一 大坂夏陣井伊家士小笠原傳兵衛手柄の事

一 信玄嫡子義信と不和の事

一 大坂より石川宗左衛門江坂清次郎組討の事

一 藤堂の士田中権右衛門組討の事

一 大坂冬陣上泉義郷指物の事

一 東照宮と越前少将忠直御不和の起原の事

一 大坂の役木村長門守を井伊家へ撃取事

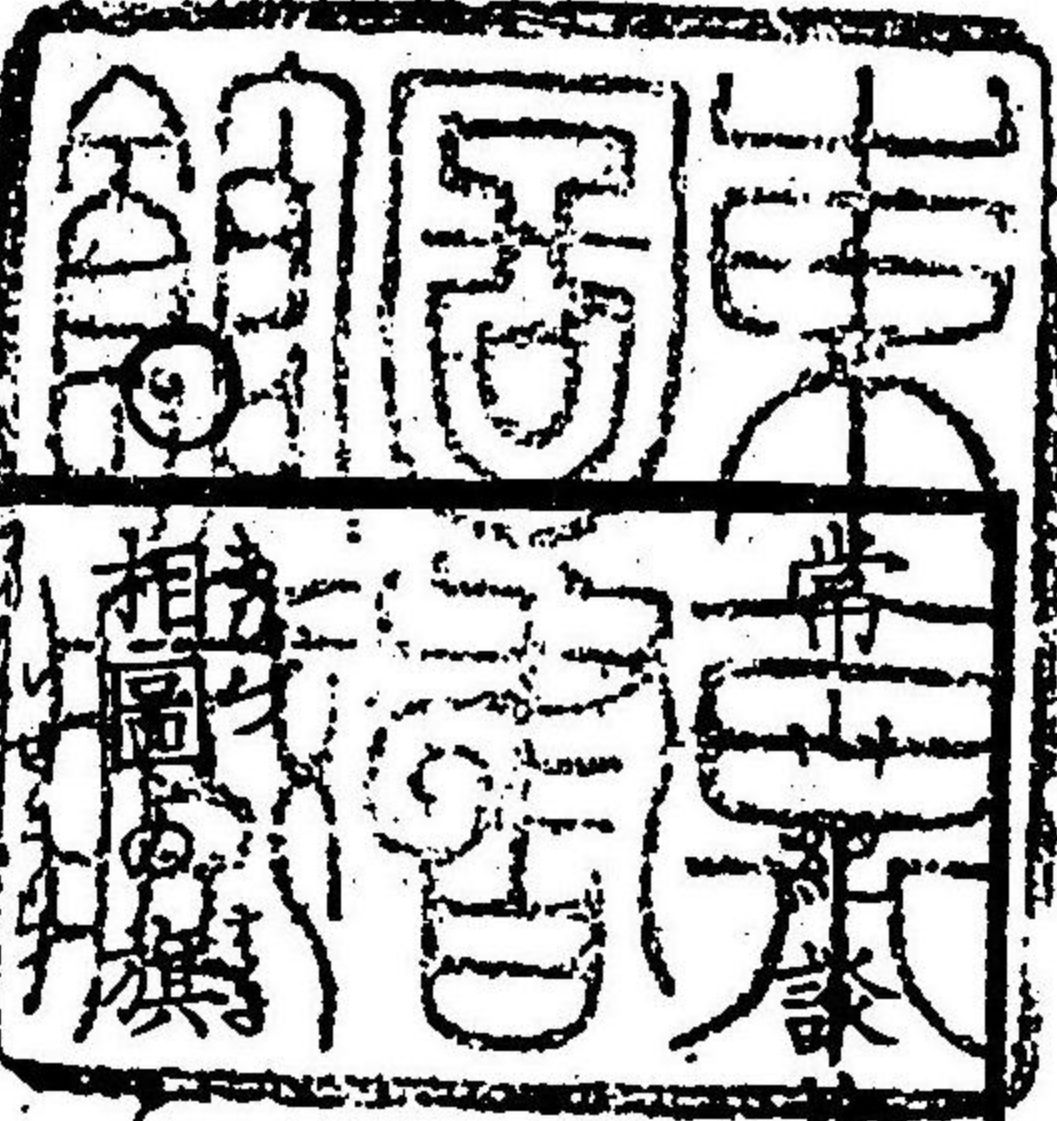
一 松平讃岐守殿具足屋若井孫四郎物語の事

一 米倉丹後ヶ子彦十郎鑊砲疵妙薬の事

一 佐野修理亮宗綱長尾但馬守頭長合戦の事

一 上杉弥五郎の事

一 佐久間河内守物語并渡部内藏助の狂歌の事



東山常陸 和遺卷之三

備藩 湯淺 元復 述

同男 明善 校

相圖の旗とあり甲陽家ニ於テハ萩原常陸守ト云大剛の武士伊勢浦の獵をなると山上ニ於テ相圖をありその相圖ニ依テ魚を捕るを見て是ニ依テ工夫をなして相圖の證據旗ト云テ之を為せり則信虎の世ニ駿河今川の家臣福島とつゝ武功の士甲州を取て我國ニせんとして駿遠の人數大軍を以テ甲州へ押入己ニ武田滅亡せんとして常陸守件の證據旗の相圖を以テ軍ニ勝テ敵の大將福島とつ討取りたりとあり是小旗ニよつて大利を得たりとあり

○ 武田信玄新田足利へ燒働一玉ふと紀敵城の高きくみ旗を置て

敵の出る出ざるその旗の相圖はよつて知りその虚實をたかす

敵の宿城を焼働去玉ひし

信州高遠の城に保科輝正廿七騎を籠城のち小笠原一万の人

敵を以て攻之のち輝正郷民を大勢かりて見せ勢とす

旗を多くもせし見せ旗とす又山上に相圖の旗を置き敵の

押来るとに半途より相圖の旗を振る石弓をかく敵の人数を

まきりて終ふ廿七騎を以て勝利を得たり

上杉景勝取上義光と合戦直江兼継長谷堂口を引拂ふとき溝口

左馬助勝路直江に向て曰く夜に入て人数引取候て大敗軍不成

べく候今夜ハ堅固の地は陣取明朝引取玉へと申す直江は最

と同日一里計引取玉小高き所の野山左り半道計行く先ハ大山爰

こそ能取をせと陣を取て夜の明るを待鎌信家の軍法懸り引と

りよつて引取玉上杉の諸軍無恙米澤へぞ引取玉あ

此時の陣取直江下知り山より半道前陣取つ山へかくらざ

るしを家康公後々御称美のち

美濃大垣より八月廿四日より九月四日まで鏝砲迫合有るふ輝

政公と西國方と此迫合の間は敵あつてさそくたつて敵より鏝

砲を放りかくるゝ不此敵の敵を追はひ此方へ取て竹を切拂

ひさハアを死せしにまると可なりと山脇源太夫竹村伊豆ハ

田豊後山の三人の番頭は仰付られ三人ともに組鏝砲を連て出張

敵を追拂ひ敵を切らひて三備もに引退んとす敵喰

留りハ八田氏殿後より追かく敵を追拂んと足輕は鏝砲を打

まゝに急なる場ゆゑまゝく打ぐりしものなり。豊後長臣柏原左
 右衛門足輕の中ふたゝりなる。これ三人をすまひき錢砲又玉樂をつ
 りせ追ひ来る敵中へ空右衛門よりかへく十四五程鉛子と放し
 馬上の敵三人程はあてられしを辟易して敵引退しり。これり柏原
 も引退り。右の玉樂を込ふる足輕の居處を見るに砂の中と不
 明で多中ふ居て玉樂を込たるとれり穴をりりする體を柏原ハ
 不見急なる。これふよく掘てをいりて玉樂を込ふる。いと笑ひこ
 る。これり柏原ハ柏原市右衛門先祖より輝政公より播磨の御普請
 場にて御慶美は段子の羽織を被下となり。これ謂きハ天下普請の
 といひ黒田殿の衆と口論し。齒を少しをられしをいりて相手を切しを
 りを得て金銀を以て入齒を志し。るとなり。此こと後柳出さきかの

○ 入齒の者りと有て御りび被下りとあり

○ 甲州家山形同心の士長坂重左衛門後井伊家仕へるとた上

泉義郷と武話ありし。重左衛門曰惣ト戰場よりたぐひし銃

將先進了利ある戦地を取んと欲する。これ我方は其地利の場を

とす。これりハ其場をとすや否や銃率より放つ。きりいをとり

て鉛子を放さすべし。不然とたハくくへ能場をとす。勝を得しり

とのへど。銃將の功を先賞する。あつれし其場をとす。さす。也

その場をこの方へ取るやいふや鉛子を放さすとたハ銃將の功

いりし。此徳を可考知し。なり

○ 信玄小田原發向のとき小田原の蓮池に於て。ひ大貳と云根来法

師の第一番槍よりついでに進んで旗本衆の二番やり。はいやなり

三

と云て槍を捨て刀をぬきて敵へ切かす首をとりてと云ふと
是向ふ渡りあり

○輝政公關原合戦の前岐阜の城攻むと合渡の川向ふ岐阜執出て
此方より来るを待かけると池田の御人數敵を見て進みか
切崩さんといさみらるるを輝政公兵機をたくすくせんは
押へまかくらせよまはを見つくりはせよ御貝吹具吹右衛
門武功ありたる者あて最早進み具を吹可然と申上げ合渡の川へ
足の三里どけふと出ま具を水まで通かかす具を大具まで吹立
ると池田の諸軍一同よ川をまくり其執み御勝利なり具吹右
衛門ハ武藤伊勢右衛門先祖なり具吹右衛門中村勘齋中村源右衛
もと高禄の具役なり輝政公右御合戦以後毎年元朝表へ御出

りし始り御言をかけたるハ具吹右衛門なり表へ御出ふくまゆ
ん目出度と吹右衛門へ御言をかちりすと吹右衛門五百八十
年御目出度ござりすと御返答申上るあ御吉例なり右の合
渡の合戦のと吹右衛門大具ハ大概長さ一尺五六寸計りありて
息よ吹く吹く見よ吹く一ものを吹くハ福田市太夫若盛の
おまをり右カ御合戦御勝利以後関ヶ原御一戦東照君御利運ふ
輝政公段々數國を封ぜらる播磨備前淡路三ヶ國の大守となり
百万石の俸禄を得玉ふおまこの大具を指て三ヶ國百万石を吹
出さる御具と寶器とありたるものなり
○朝鮮陣のら甲冑兵器損ト諸軍難義なり一後々ハ銘々漆を以
て脩補せしり漆を塗る風呂あきおま乾もしとありが

難儀に作意ある人有りて塗物を置る廻り小馬糞を集
り置る水バ一夜宛干き置ると也

○馬ハ人氣行々やまめりりき氣つた馬をくぐり戰場長陣ハ
あゝくぐりワッのやうに氣つた悪相ある馬も長陣をハ祿こ
此如くあるやれり松永彈正久秀の衆も馬を八田豊後求めて大
坂陣のろあ衆もに入氣行々工ものかたに吉介よりハ異相の
馬取あやま響と持てかゝるを前足をらげ喰んと口を明てか
ふと此響をもまぜて津出せしめり大阪陣以後あの馬を駿州の
島田へ買駄馬とふりよるふ其以後四五年も小荷駄を荷を付て
若馬の如くふりよるとありあき氣性つよた馬ふる由是此の如く
〜〜〜とありハ田正久大坂陣のより十八歳まで有りきと

なると右の馬取の吉助を正久の馬取となり付りきよるふ大坂
夏陣落城のより崩口ふ壘付の首を取らせよるふ敵を槍付け突伏
せ首を取らせよると吉介云々敵の刀をとり玉へ不然と
ハそれ敵の分量知まか〜と云て正久ハ同心無之を右の敵の
刀を取るとなり件の刀高田の刀あり朱鞘あり〜とあり初槍合
のより正久の槍の太刀打を敵刀を以て切拂ひ〜とあり及なれと
るや〜ハその初より折〜とあり右の分捕の刀此太刀打の處大
豆粒ほど及なれ〜とあり壘ハ小田原盛の金さび〜と終り不見
能き盛ありと云り然きとも池田利隆の手を壘付の首三つあり
ハ無之ゆゑ壘を付て御旗本へ遣せ〜とあり八田家〜とあり

如

○ 行軍のとれ大将諸軍を巡り見玉ふと古法なり関ヶ原合戦の行軍のとれ池田輝政公諸卒の左の方をしくくと乗出し先手まで乗行て先手の先まで馬を右の方へ折り諸卒の右の方を地道に乗て後陣まで順見ありとれ馬戻りふ地道をのりふふことハ先手までをのり行き玉ふときハ諸卒前へゆくゆき早道よのりゆきそれを乗ゆけり先手の先までをのりぬけ右の方へ折て押行く諸卒の右の方へ来て戻り玉ふとれハ地道にて静くよのり戻りたすをしくども諸卒ハ先へゆくゆき後陣まで地道よのり間をとらびしを悉く順見ありゆきを以てたり

○ 大河とてとれハ馬武者と川上を渡り川をきりて川下を

歩率もくくたハ大勢のゆきゆひも馬獲もくもあふ危きあふ武藏守利隆公諸卒天満川をまたき右の如く川上を馬武者一同りと川へ乗込てゆくそは川下と歩率もくも何の苦惱もあふ悉く渡せりゆき大勢の中只一騎まづて物上へ浮てゆきゆき急なる場ゆ引上る人かく水に没し死より右の一騎溺死せり外に未ヤまで一人も水に没したるとれなりとれ

○ 大坂陣のとれ利隆公そあへの武者奉行須賀伊豆舟帯刀兩人あ武者奉行ハ我組の士卒ありて八成がく番頭の隠居なとの如く人の重んじて年老ある武功ある人を用のべきあゆり

○ 大坂の役は池田の諸士頗當をかけるとれ一人も上使の城

和泉一人類當かけしるしれり然きども齒あり老士ある類當せ
か多きとてハ忍の緒を志むると死ハ口まきまき物言ひりし
ゆえにかゝるあまよひとせり

○ 曹の頭一まづつりさるハあり銘子ありたるとゆひびきつ
よく氣も静してつゝ大坂冬陣のあつうひの多死井伊家の
物頭井樺へあがり遠見せしに銘子来りて曹より率えしき
るに引ならし曹をぬぐせしうしぬげせしうくぬげたりとて
とて疵不見りし尋るる處額の米かしの所より玉半分不
どどひ曹へさきたりこれ曹つりしゆえあり終るその疵を
死したりとせり

○ 上杉謙信の馬どろ大根の折かけとハ赤根地折掛旗は大根を白

くのありたるとせり也

○ 大坂夏陣五月七日天王寺口へ秀頼のひかりの御馬印出か
りしとき關東方は秀頼の御馬出真田左衛門佐先手とて切か
ふとつふ風説ありしつゝや關東方の惣軍ありのりしつゝも
たし諸手悉崩し追ふともあく大敗軍となり井伊家士小笠原
傳兵衛三 百禰子と若黨以上三人も直孝の赤根の四半は金
井の字は馬印を捨て北をとりて押立たるを見て總軍の北にや
き掃部頭殿の人勢が返りしとハと言て銘々も返りしとて
終る御勝利となりしとせり小笠原後に加増して取立し
とせり右の敗軍のとき銘々もや返せしと云ふが北
とせり何のりちも北に何とすんまきやうせりとの

なりと義郷の咄なり右の馬印を立ると見て惣軍かく一たるを見
て破軍星の尾返分合と云たるとありとの敗軍のとに兩御所
様の御旗本大崩れと家康公も度々御腹をゆきんとありと云
御近習大久保彦左衛門あどら免らきと云なり後々家康公
御武功の御物語らふとにハ此御敗軍のとに已に御腹めきんと
ありを度々御の申す御腹めきと終に天下の御主とあり奉
るや大久保申されるとあり

○
信玄嫡子義信と不和あり川中島合戦のとに義信ハ旗本組の
右備あり然るに夜中謙信犀川をえと近々と備へ無二の合戦
を持てかゝりきたるを見て旗本備へ義信をやり信玄ハ義信の備へ
懸旗本組の右備居りきたる謙信信玄の旗本備義信を切崩し

義信も數ヶ所手と負きとくに信玄居りまざるゆゑ信玄の居りま
るる右備へ切てかゝり信玄の床机居りまると太刀を切らま
るるを信玄軍扇をとり受りま側より中間頭原大隅槍をとりつれ
一つきまづ謙信の馬の三頭を叩き馬走り出て退きまるとゆゑ討
まづ一たるとあり此合戦以後義信ハ強敵の鎌信無二の戦を持き
るるゆゑ旗本備へ居りまその身の危きを以て常々不和ありを以
て義信を旗本備へ床机を切り捨殺しよせんとの工ありと思ハ
るる父信玄をとり終に飯富兵部も免らきと云つて反逆有る信玄
怒り義信を切腹せし免らきと云つて上泉義郷の咄なりとあり其證
據も甲陽軍鑑より合戦は信玄の旗本備崩れ信玄ハ何所も御
坐せざるゆゑ不知混乱と云つて所へ謙信太刀をぬき持て信玄の床

机に居られしを切りし信玄軍扇をとりて受しきしと云ふハ信
玄と義信と末机をかくしきし證據まゝり法令嚴なる信玄旗本の
備はあつて御坐所を云程のしつかりしなり

○大坂少々日本の諸士入交りて戦まじきも組打ハしれなり井伊家
の士石川宗左衛門江坂清次郎兩人組打せり其首尾ハ城兵突て出
るるも城兵と石川と槍を合せたるも相手の敵兵やうて仕合
るるもさうけんたひ入くと槍をすくと太刀打となり敵石川が
太刀を持つる掌ときり付け無名指小指を切るとせり也一太刀を
捨て手と手ととり合組合うるも敵ハ瘦弱の男石川ハ大兵少く腕
先もつらうも也敵を組伏しきし初ハ太刀少く右の無名指と小
指を切られし也一首を取べきやうなり我々方をこれぞ味方の兵

江坂清次郎つまきひ之しゆ言かけて是首とり候と之を江坂
ハ十七歳の若武者なりが他人の組伏する敵の首を我等ハ取るま
ときひありと答へるも石川右の手を見せし如此指を切られし
ゆ長首を揚がくと云たるを聞て其も敵の首を揚たるとせり
井伊氏の本陣へ右の首を持参するも江坂ハ元來石川が組伏す
る首を揚するゆゑも中々我功あり候と有のち云ふも也も兩人
とも御感より同列不加増ありしなり

○又藤堂氏の家士田中権左衛門弓持敵と出りひさしひと矢聲
をうけ矢を放ししゆ或敵急に進み来り十文字の槍を突かり
田中が矢をひきとりたる弓を鎌にて突切するも也も弓を捨て敵と組
合敵を組伏し首を取たるなり凡大坂陣のち諸軍の中より組打

ハ井伊家の石川江坂と藤堂家の田中此三士の兩々打迄かりと也

○大坂冬陣の時に井伊家の諸士真田出丸の堀下小つねと堀際
 の柵をくぐる堀際へ付くは柵をくぐるに物邪ナリなりと
 ゆゑちまきをぬき槍ヲ持てて柵を通りて上泉義郷ハ指物をがら
 マツて紫革少ヲ結ビ付てふまけりてふゆゑちまきとひとて日頃
 心易出入しを目とけりて足輕の小頭何某義郷の阿はついで柵
 のどろふふ義郷のうゝの留をたぐりて見えて義郷の傍
 ふより治部左衛門様此場へさつてきてとて云て件の指との留の
 緒ととまるとまきとゆゑ指とのぬきを槍ヲ持てて柵をくぐる堀下
 へ着るとなり是き義郷指され留をせとまきと證據ありと餘の諸

士ハきりとの留をせとまきとや早速ぬきを柵とくぐるなり右の足
 輕小頭右の場所へ出て義郷のうゝの留は解るるとまきと其場
 へつとまきと證據とて大坂の役終り治平少ありてと加州へ三百
 石とて身上濟とてなり

○上泉義郷曰越前少将忠直卿一後伯東照宮と不和の起原ハ大坂み
 諸手の持口の圖と銘々みとて見よと上意の多越前の持口
 の敵城のわくをまきとて彩色圖を出されとて神君一目御
 覽有て役ふ立ぬ男ありと有て御見限有て其のち御不和也とて
 り惣とて敵城の圖あどを鹿相とて圖を出すとて古法なりと
 あり神君ハかやうの古法よく御覺ありと武の法よく御吟味あり
 たり名将ありと故又天下に御手入ると申さなり

○大坂の役ハ木村長門守と井伊家へ撃つ。首尾ハ木村若江の村屋へ入る割合の晝食を食し居る。井伊家の斥候盤若内膳見て帰る。先手の將庵原助右衛門へ告ぐ。庵原槍を取てかゝると水村も走出て槍を合せ二間一尺五寸の直槍その頃北國流と云て有り。木村も免許を得る。功手ある。ゆゑ此槍を以て庵原の内胃を二三ヶ所突く。此の槍の穂はかく切突き。と突くとゆゑ頬の邊に刺り手ある。ゆゑ突ぬひを突たす。とゆゑ庵原ハ一間半ほどに身の七八寸程の槍をべつたり。ゆゑ木村を槍付て突付た。ゆゑゆゑゆゑ井伊家の若士安藤長三郎来るとは首を揚んとゆゑ。庵原揚候とゆゑ。安藤一首を揚させ木村が腰は指たる。白熊の旄を引ちぎりて庵原が腰につけて引とる。ゆゑゆゑゆゑ此首誰か首とも其と地

ハ知れぬ。ゆゑ白旄ゆゑ。大将分と見え。ゆゑ後證ゆゑ。庵原とゆゑ。腰は付とる。ゆゑ後ハ木村が首と知き。ゆゑ安藤も元來庵原氏槍付た。ゆゑ首を揚とる。ゆゑと断。ゆゑゆゑ。庵原ハ井伊家の老臣年七十有餘。ゆゑ常ハ腋ハ珠敷とゆゑ。念佛ゆゑ。唱とる。ゆゑ。向來ハ敵ゆゑ。あし。ゆゑ。得ぬ。念佛を唱とる。敵の槍をよほ。槍付とる。ゆゑ。已ハ功とる。若草の士ハハ様ハ名とる。士の首を取とる。功名ハ顯す。ゆゑ。強ハ安藤ハゆゑ。ゆゑ。故ハ首帳ハ。安藤ハ姓名を記し。出し。安藤ハ武功。ゆゑ。今ハ至て木村ハ。安藤ハ。ゆゑ。天下ハ。称。ゆゑ。庵原武功。ゆゑ。ゆゑ。仕方ハ。ゆゑ。右ハ。泉義郷の直談。ゆゑ。詳ハ。此ハ。合戦。ゆゑ。三ヶ所。戦記。ゆゑ。ゆゑ。木村ハ。勇士。あり。ゆゑ。ゆゑ。若將。ゆゑ。晝食の喰時。分期。を。あ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。晝食を喰かり。た。ゆゑ。敵ハ

糞と水と立て用バ必功有とソありり米倉が僕ら身を調とて
 米倉不飲一々曰ま身を飲で必可生可死未知ちば果一を死せ
 て不飲とも有らんと人生ととも畜類の糞を飲で其耻を如何せん
 ぞて服せば甘利色を正し御邊の言曾て理なき命を保て忠をか
 一孝を行や道の重きよりや獸糞をのむは耻ハ輕きよりぞや
 小辱を不怒して大道を捨るハ狂まると似たり是勇のそ有て智と
 不盡の失なり薬のくまきあるもあらん我先へ試むべしを二口三
 口吞て舌打し甚香りと米倉ありふ米倉理し伏し則服し快
 復するあをを得たり信玄聞て甘利を譽らんと甚し或人曰米倉終
 二糞汁とのどぐべし死せむ勇のそ是を潔事と思ひし此
 類の藥と忌嫌風俗とをり後來幾人ハ横死せし計づるに且陣中

○
 専ら如此手輕き藥を以て珍とせし

佐野修理亮宗綱ハ下総唐澤ニ有て足利の長尾但馬守頭長と郡邑
 を争ふ或は宗綱ハ岡崎山ニ陣し頭長ハ唯木山ニ屯も兩山の間
 小川ありこを隔て日々足輕攻合のころ未勝敗をくりし時頭
 長兵と入り其体嚴肅なり宗綱も同く師を引返んて密に兵を分
 つし山間の樵路より兵をすめ大沼田とつふ所ニ廻り頭長が前路
 二令出頭長あまを宗綱ハ陣拂し段々引行今を漸進し隔
 りて後襲の恐なりと思ひ用心の備稍急り諸勢の足を乱しを引
 行宗綱ハ廻備の出合程を量り俄に旄を還し頭長追廻備の勢横合
 不出て頭長刀備を突ハ頭長大敗し追討し逢ふの甚多し宗綱思
 り利を得て唐澤より去る

○ 畠山修理大夫義隆能登を領す毒害ありて後家臣遊佐彈正
温井備中長對馬を始十一人その勢二千計七尾の城に籠り信長に
従ふ上杉弥五郎義春ハ義隆の伯父也越後ニ在り此由と聞謙信ニ
乞て七尾を攻めし城兵を誅す謙信義春が先登の功有を以て
能登ハ代々畠山の領す義春ニ預んとれ内意あり能登の兵士あ
まを聞て義春出世有らば我々も同く世に出んと追々馳來るおと
夥し謙信柴山とつふ所又陣一惣人數の押前を見んと謙信ハ床
机ニ腰をくゞ義春ハ側ニ畏り居る能登先鋒の人數美々其物具
みり出来る謙信人を遣して其勢を問彼執上杉弥五郎が勢ありと答
次ニ通るその次又通るも其勢五郎が勢ありと名乗夥し其多勢也
謙信氣色變り暫し其勢五郎を切み三好宗三八五畿内を弓矢功

○ 者の名将なり宗三常々人數ハ難遣とのなり三百騎より上の勢ハ遣
ふべしとのなりと度々云々と聞たりと言てつゞが詞あり謙信死去ま
じも弥五郎をみりて勘當同前より能登も與へば止むぬ弥五郎
後畠山入菴と号す

○ 佐久間河内守實政物がらり大坂御陣のとき大鳴野合戦のとき小栗
又市吉忠と我と兩人檢使に仰付らる但し十一月廿五日又兩人鳴
野上杉の陣所へまわり明日今福口の柵をりてく吉佐竹義宜は仰
付らき屋代越中守伊東右馬允安藤治右衛門遣き景勝も明日鳴
野口の柵をり中きく吉仰出さる直江山城守兼海申候ハ一昨
日奥州より到着仕候由へ人馬の足を休め其上のまゝ仕度と申佐
久間小栗申候ハ謙信以来着陣すはかりし御一戦と兼及び候山

城ハハふらと申され候と斷り候へバ直江上意重く候間明日とて
つ及申べく昔御請申上候廿六日早天より景勝人数を出さる候城
方の柵ハ井上五郎右衛門渡部内藏介并大野修理亮治長手のと此
加マ山市左衛門尉吉正小早川左衛門岡村椿之助竹田兵庫其子大
助二千余り柵三重をり持固め候前の夜景勝ハ直江山城を呼備
祖をりり直江申候ハ老功より候ゆゑ安田上総介を先手ニ申付ニ
の先ハ須田大炊ニ申付候とす景勝も色ハあき配立あり二の目
功者よりあきらめ軍勝ハあり須田を先手ニ安田を二の先ニ立べ
と有付直江備をりかへ申候とすより須田備ハ競り二の先ハ安
田手より手柄を見せんと候と候安田備ハ先手を二の先にくマ
えらき口惜存候先手崩より二の手より返り一手柄せんと候

むゆゑ両備の士卒中々勇氣十倍とあり景勝勇才凡人の及ぶ所
あり感状ありと廿六日曙ニ大坂方へ取かへり山市左兵衛大将
より鑓砲大将井上五郎右衛門等柵の外へ出て防戦ひ候須田大炊
先手より景勝勢真先ふか候勝負數度あり有候上杉方多功豊後
守手柄高名あり北條清右衛門上泉主水櫻田獄大膳ハ左衛門同彦
六郎手柄とあり討死す須田大炊下知りて遂に打勝大坂方井上五
郎右衛門と討り柵二重をり押込申候大坂方山市左兵衛渡邊
内藏介敗軍とせ場をり敷候景勝ハ鴨野の横堤に旗本を立直江
山城守に申付鑓孫左衛門に鑓砲三百挺遣り物場よりとり南大
和川の堤をりきり蘆谷に足輕を立取固候上杉衆申候ハ小口と
とり脇とり固め候と不合点あり手配よりあやき申候と

日午刻ニ大坂七組青木民部少輔一之伊東丹後守長實速水甲斐守
 守之中島式部少輔氏種野々村伊豫守雅春真野豊後守頼包堀田圖
 書助勝嘉之れ時ハ天満口普請場ニシテ一が鳴野今福兩口破せ候由
 兼り天満より鴨野へかき付候城より大野修理亮洛長木村主計
 頭宗重渡邊内藏助亂竹田永翁等ニけ出候上杉先手須田大炊介長義
 ハ石坂新左衛門百人鍊砲にて備一の木戸口をうき打立申候半時
 ざり合候一も大坂方大軍ゆゑ真黒ニかて候上杉方鍊砲大將
 石坂新左衛門場をきり討死組勢廿餘人討せ須田大炊頭追立ち候
 へも二の先安田上総介兼て備を脇へ押出し立候ゆゑ須田備ハ景
 勝旗本前へくき申候此と上杉方島津玄蕃ハ敵大勢より合沼
 の中へ突落され起上り槍を合せ大坂方をつきちりし手柄仕り高名

松本助兵衛北村茂助もえんじよたつひ兩人ともに高名仕り候市
 川左衛門針生市之助原庄兵衛助澤與五郎等も上杉家究竟の兵
 挑をくく討死仕り候須田大炊備不きかきり景勝旗本前備ハ摺
 原常陸介親憲錢砲三段立金の鎌の馬印をとりて御意より候間須
 田人數兩方へえん退候へと馬印をとり候へ須田備兩方へ引
 とり候杉原下知し追ひきり敵を引りけ錢砲をうち立候所と二
 の先より脇へ扣へ候安田上総介をとりて横合より入る候
 ゆゑ大坂方惣敗軍をり申候安田が手柄中々耳目を驚り候大
 坂方杉森市兵衛湯川次兵衛田邊八左衛門幡枝勘々由米村加々右衛
 門平山藤藏茨木五左衛門安宅源八等返り合防候へども安田上総
 急ニ操立候ゆゑ大坂方くばき申候安田勝ニ乗て小早川左兵衛岡

村椿之介竹田兵庫同大助と初追討より候も此内穴澤主殿
 介ハ長刀の名師より秀頼公の師匠より候高所又返り合穴澤主殿
 介盛秀と名り候と上杉方坂田采女組打込仕り穴澤が首より
 候穴澤長刀と直江家来折下外記分取仕り候と上杉先手の大
 將須田大炊見申さば行衛不知ゆゑ討死と存候所又敵中又交り
 大炊手柄より太刀打直取の高名三ツ手疵一ヶ所蒙り若黨五人か
 ら高名より出来り候ゆゑ諸人より申候扱柵際より大坂方と上
 杉方鏝砲軍時より此より今福口へり木村長門守重成後藤又兵
 衛基次堀田圖書介勝嘉出で一戦佐竹義宣先手澁江内膳討死梅津
 半右衛門戸村十太夫槍を合せ手負引退く加勢を乞候故杉原常陸
 百五十挺の種ヶ島を添て遣川の中洲より打立候ゆゑ木村

長門守後藤又兵衛引退く佐竹も此場より返すも杉原も須
 田安田も加て鏝砲軍數刻及び候と付御旗本より五の守御使
 番追々参り堀尾山城守忠晴を御入替有べく間景勝ハ元の陣へ
 引と申すべき吉類と仰遣さば候堀尾山城守へも早々景勝も可入
 替吉御付さば候忠晴畏り堀尾河内同修理前田丹後二百余遣一候
 へども城方より大筒を出し候ゆゑ堀尾人數進まば候へども忠晴
 よも重て伊賀衆手岳八十人遣り御使番重々堀尾の場を渡り
 べしと仰遣さば候景勝無與りて場を引取べしハ誰の差圖
 候と更し兼て届候上の御意より罷てなす軍の習先陣と
 争ふ時ハ一寸増し兼り候今朝より粉骨してとて數候場人より
 引取法や有べき少し引取ると罷ると由景勝が申と上へ仰

上野色より云て少も不退候景勝の馬廻三百余槍を立了頭を傾け
 畏き居り多し景勝ハ鎧を不着床机ノ腰をかき朝より城ノ向て脇
 目もろく先手の合戦見物なり側ハ紺地日の丸大四半と毗の字
 此大四半只二本ノ淺黄の扇の馬印押立候多し武者立行義の正ノ
 記あり中々言語同断あり士平景勝を恐るるを敵より甚し下知
 の聞古と武者拵へ比類なれども此より丹羽五郎立衛門長
 重ハ上校の後陣とて候先手の戦を見了景勝の旗木へ参り候
 へども上校家作法より備の中へ不入候付先手へ馳加り申き大
 坂方次第ノかき候より直江下知より大和川堤蘆谷の柵場より
 鏡孫左衛門鏡砲を横合より込替々やうとせ候付大坂方柵を持
 了と不叶遂に敗軍ノは場をとりし景勝の勝となり申候堀尾人

數も柵を廻り大和川洲崎より鏡砲をうち申候この日城方槍の名
 師渡邊内藏介大逃仕り候前日野田の藤見の多しの喧嘩した手柄
 有之候へども今日ハ上杉方追立ちき人先逃申付て
 一渡邊ケ浮名を多す鴨野川敵より了ハ目ハとれ介
 鎗兵法名人より武道ノハ役立了と勿論候今日景勝下
 知より大和川の堤を掘り柵をりり鏡孫左衛門より置候合
 戦場よりハ脇子候ゆえ皆々不審仕候柵掘切も敵付たおそ尤
 了候とてもあきまは候とつらや候取後の合戦は鏡が手よ
 り横鏡砲打候不付遂に大坂方敗軍景勝の勝あり申ゆえ諸人景
 勝の勇智淺からざるを感し名將ありと舌をうひ候は由その腕
 鴨野より佐久間河内小栗又市住吉御本陣へまゝ帰り合戦の次第五

上御次の間より小栗又市申候ハさうく今日能打所有しと打候へ
 と申さきども日暮かゝり候とそ不打なりとのり多きに直江は足
 軽をかせ我進討べいと云さきとも日暮かゝり候とそ足軽をか
 きび残多きせん〜〜〜障子と隔て家康公御聞あさ
 き其まゝ御氣色かゝり御きざん損トやあ又市已まが分りて景勝
 武邊に誅す〜〜無用あり推参あること申大だ〜〜御志
 であらう又市赤面し〜〜罷り立候鳴野合戦の翌日兩御所様御同道ふ
 り鳴野口御巡見なりさき上杉陣場御通り〜〜時上杉惣手より城
 へ銃砲を〜〜放ち但御大将御巡見の時の作法故實の由なりさき
 景勝町場道筋破り水と酒きを掃除き〜びや〜〜なり景勝
 も直江一人供〜〜し出す地〜〜つき御目見す家康公仰り候

ハ昨日を當表し〜〜其方人数骨折候より御懇の上意りり景勝御請
 童部〜〜御坐候ゆゑ何の骨折候あとも無御坐と御挨拶申
 上らき候後日上杉家人須田大炊杉原常陸島津玄蕃鐔孫左衛門
 御感状下さき皆々御前へ召出さき候如此三人ハ御感状を戴て罷
 立杉原常陸計御前より御感状ひらき拜見仕元の〜〜巻納へたく
 き〜〜懐中仕本多佐渡守に向て御吟味御文言の〜〜所も〜〜忝仕
 合と申上さ〜〜立候〜〜人感ト免申候〜〜砌上意〜〜ハ今度上
 杉家中手柄仕候と仰り候常陸介〜〜〜〜輝虎已来弓矢の〜〜
 かりのり申候より御挨拶申し上さ〜〜立候諸人感ト申候上杉二
 の先安田上総今度鳴野より第一の手柄〜〜横〜〜大坂方
 突〜〜味方の勝〜〜あり候〜〜直江山城と中〜〜き故書付〜

入ざりゆゑ上聞は達せば御感状不被下候その後景勝が所へ皆々
 と呼出し今度鳴野表みまハ何きも精を出し候て満足なり
 候去なると大坂弱敵なり輝虎己来武邊仕なせし各なきバ氣遣
 もあくつらふげりあつらりと申さる安田上総公進之出各ハ仕合よく
 上聞は達し御感状拜領して目出度存候我等一人ハ誰も取次不申
 御感状拜領仕らば候へども昔より數度合戦は随分御奉公申上て
 人をバ越ども人ハ越らせば候そは上今度程のあや我等功は立申
 様無之候今も珍し候就中我等は不限屋形様
 へ身命を擲て稼候曾て公方への御奉公を仕らば候ゆゑ御感
 状少しも望ま存せざ候己来とも殿様へ御奉公の命を捨可申候
 公方へ奉公を仕るべく子細なるバ御感状羨しく無之と申候ま

た杉原常陸ハ今度御陣は重代の物具古く見苦しとて猿樂の法被
 を衣了大坂へ立家康公御覽あきま上杉家古き風を錦の甲直笠
 を着たり皆々後學に見置候へと上意成候より杉原老武者殊とを
 どけ者みそ古き鎧見苦しとて上は能の法被を着てたしと也後
 日は杉原帰陣して皆々語候ハ扱々今度ハ思ひより御感状拜領して
 子孫の寶を得るともや其ゆへに今度大坂御陣ハ子供つらひのつど
 て打合の様なるべしと別は恐る骨折あるもあはなり昔
 関東陣越後ふと今日死る今くと思ふや成烈しき合戦は
 明暮逢ふも御感状を取らば今度の様なる花見同前のお
 とに上様より御感状よりと大に笑ひし由

常山紀談拾遺卷之三終

常山紀談拾遺卷之四目次

- 一 岐阜攻の岐川々洪水より後藤又兵衛尋問の事
- 一 家康公慶長五年七月會津御發向の事
- 一 秀吉尾州進發の事
- 一 朝鮮陣中加藤清正の馬糠下知の事
- 一 秀忠公參州田原御狩の事
- 一 細川家銃砲口藥入の事
- 一 秀吉岐阜攻の事
- 一 源君久世三四郎坂部三十郎へ物見仰付らる事
- 一 豊前國紀伊谷紀伊弥三郎籠城の事
- 一 清正の士腰兵糧と持寄て不貞の事

一 直江山城守伊達政宗加勢を乞ふ事

一 赤井惣右衛門武勇の事

一 源君長久手御馬揃の事

一 大阪夏御陣真田左衛門佐幸村勇戦の事

一 同時木村長門守敗北の事

一 同冬御陣越前忠直卿の手仕寄の事

一 信玄の士小幡豊後物見の事

一 嶋原一揆の昶寺澤兵庫頭知計の事

一 源君御扈從中根左源太勘氣御免の事

一 嶋原一揆の昶紀伊頼宣卿明知の事

一 大阪陣渡邊圖書即知の事

一 嶋原攻並河九兵衛足輕下知の事

一 伴助右衛門水戸家へ召抱らるる事

一 嶋原落城足輕陣佐左衛門手柄の事

一 松山新助の勇將中村新兵衛の事

一 大阪攻の昶平野村失火安藤治右衛門遅参の事

一 城和泉守長盛讒言の事

常山紀談拾遺卷之四

備藩

湯淺

元禎

速

同男

明善

校

○ 関ヶ原御陣前々福嶋正則池田輝政外大名十二頭より岐阜の城
 と攻る黒田長政田中兵部少輔藤堂高虎桑山伊賀守戸川肥後守
 ハ大山押下居る岐阜と攻る寂中ニ大山の城明のき候し付長政
 高虎何も岐阜へ推つり候内岐阜落城ニ長政高虎等残念と思ひ
 所へ岐阜後詰としく大垣より石田三成島津義弘小西行長二万餘
 りより江土川迄押来る長政吉政高虎兼山戸川等幸と悦江戸
 川へ馳向ひ大垣勢漫々と川向し備へしに八月雨の洪水増て瀬
 枕打て流を早く水事々出る何事も香ヶ島村の札の辻に集り五人

の大將の床机に腰とくけ居る家老功者どもと集て談合する川とこ
えり合戦利ありき又こそさき利あるへきう勝負の所談合もとこ移
まきまきの一決をさるる後藤又兵衛政次頭形の甲は孔雀の引廻
しは五尺つ出する銀の天衝のつり立物一黒母衣うけたる遠々畏居
る高虎申さ候へりて罷ある銀の天衝の黒田殿御内後藤又兵
衛と見え呼寄り了簡と尋聞んとり長政の曰皆歴々寄て
埒ありき談合を何とく又兵衛了簡仕さやと謙退あり高虎左様
てこそあ候又兵衛のびと申者候候候扇ふく口をひ
つへ又兵衛黒母衣ゆりけ参り畏り候藤堂申さ候候候又兵
衛此川と渡り利有べき川と前々當渡らむ利あり先程
より相談極まり決了簡と尋る所あり川と渡りこそ勝負

りんとあ又兵衛よりと笑ひ先程より承り候憚り各
様あり御相談所へ不存候その子細は今昼おき御坐候て岐阜
の手へ御あひ不被成何と以て内府へ仰立ち候成さ候候んや
爰より御一戦ありれが恐あから各様男と成申さ候候勝も負
りゆりむのりこ一戦遊まき此川と墓所なるる候と眼は角
と立申候つハ諸大將手を打く扱々尤至極ありと云ふ及んを
江戸川とこ大和を得らなとあり大阪表今福合戦も又兵衛
鏡砲より疵とさき見く大阪も御運もま強きや我手浅
と云ふ

○
関ヶ原御陣起り候より慶長五年七月家康公秀忠公數万を
會津へ御發向あり候あり景勝上洛し香指原へ新

城とて立諸浪人と集り道橋と修理し籠城の用意と聞し召御
退治の事此の如く景勝大に驚き香推が原新城の直江山城守
上意を得く公議濟より上り又在國の秀吉公御在世の初り五年
在國の御いと濟する所あり然も押付て御征伐あり候ハ弓
矢も身のあはれ一矢仕るべく百三十万石の諸侍の心を呼集
り洞菩提所雲洞院と謙信御影堂毘沙門堂に於て一紙の起請文
と書せ妻子と會津の城へ籠口々々焼草と込め景勝の家老物
頭とあつり會津ハ七口あり殊に背炎南山口の會津と見下し中々
籠城する所あり家康公御父子白川口に着陣候に逆寄り
仕り野合の一戦とてけて勝候もあつと追て江戸へ扱あき都迄
切て登る負候に士卒もあつと白川と枕し討死仕る

候下野と奥州の境白坂より白川まで二里の間草籠が原と云所あ
りよき戦場あり竹木を切け地形をきり平け白石城を大手の
一の木戸と一番合戦の安田上総介一万三千余二番合戦の嶋
津月下齋二万七千余白川の城に籠り家康公御父子御着陣は
草籠村へ押出一戦一若し勝むば白川の城へ引り四方の人数
同枕し討死を可遂とせし士卒上下経帷子血脉と頭しけり
家康公と待り候景勝只一騎背炎南山口の山嶺より長沼の地
形を見て夫より樵夫と案内者ふり山中を通り白川口境の明神
ふり人数押の道を見積り密に了簡を定め候に家康公白川の
城と攻り候所を長沼より兼て見置山中と人数を引つと境の明
神より家康公陣取の後へ出旗本へ切り手誥の勝負と

可決とつり置き候上杉家中にたきも知らるる近日家康公御
着陣御先手榊原式部大輔康政も大田原に著大田原より白川
より一日路あり景勝を召つて八千余を召つてひらき會津を出
南山背灸とて此山を背に當て長沼へ陣取家康公白川表へ御着
御一戦候つて山中を推着思もよらぬ後へ廻り家康公御旗本へ切
り入り申す覚悟よく陣より候八千のちきり小勢に候と家老ども異
見仕り候へども謙信己來の吉例とて承引無之直江齋藤千坂等
申候へ謙信公御代の古兵ども過半死失物もなきはる人数八千を
りり候と申候景勝へ勝利を得ば八千に不過候へども皆々申所余
義もよく許容あり是より千坂齋藤新津三室寺等三万より長
沼へゆきたり候へども景勝さうづり三里の陣より候若家康公

白川へ御着陣候つて御大事に罷らるべく候所上方より治部少輔
とていり五畿内西國一圓の乱を伏見へとり入り候由家康公小山
より江戸へ御帰城あり候や景勝手立相違仕候若白川城御攻
め候とき景勝八千より御後より不意に仕り候ふるとん御
一代の御大事たききり候とて御運つて御大将とその己後と沙
汰仕り候右の通りや景勝も會津へ引入申さる

○
秀吉尾張を發して信雄源君を征せんとい先泉州岸和田の城中村
式部少輔一氏を籠置紀州の根來雜賀の一揆を押しむ信雄密に
根來雜賀の一揆をとりて秀吉大阪を發せしむ必その跡を責て秀吉
の巢穴と破らんとせらるる一揆等同意して天正十二年三月十
八日二万計海陸に分て堺の浦へ働出く大坂の空虚を襲んとて一

氏下知し大敵あり容易に戦ひ尾張地の御戦い害あるべしとて
一人も不出泉州の國侍に真鍋五郎右衛門貞成 此時号次郎俊成号主馬大夫 十七
歳一氏に從く城中に有しか一氏に乞ひ一揆船手と働と見え候某
在所大津の家人の妻子を差置候へば参り片付候やと申せしを
一氏尤もりとて許之真鍋手勢百世餘り大津より舟手の一揆
大津を差て押來り大津の混乱不斜留守のころのども昔
小城の有跡の妻子を連行戸板置をりて岡ふ所へ真鍋出來と
ば少く安心まといども一揆に千余騎味方へ百余對當まきまら
さるる士卒危く恐らく敗走の機あり真鍋が與力に秋山亦之丞と号
する大剛の勇士あり其已前一日に槍を七度合する程の覚れ者あり
真鍋に向くやある時節が肝要あり大将の心うらむる時士卒

役も不立ものありよりに合点ありて下知せらるるよと云真鍋その
仕形に如何秋山が曰今の仕形三ツあり第一の妻子を古城へとり籠り
城に據りて戦ふ第二の妻子を堺の津へ退け我々の真丸あり
困をつき破り岸和田へ駈入り第三の妻子を連て堺の津へ退く此三
よ外ありと云真鍋盛の緒とありあが三ツの謀上中下の如何秋山
が曰その一の上其二の中第三の下あり真鍋あがが妻子のうとも古
城に據りて戦ふ謀を用ひん秋山聞て左の一人ものうに撃死を
す不苦や真鍋の秋山が足と刀と抜て金打り愛宕八幡に
て討死まきまらとて思切らる有さまあり士卒是に勵まされて必
死と思定めらるる体あり真鍋海上を見や敵船己に近付り敵
の十倍の勢あり取巻まきまら叶まら迎戦てこそとて濱手に出く備を

設く田賀井別齋秋山又之丞下知して敵の舟より半上る所を鑊砲と打立うたてて敵兵打挫うちくれりうねる處と真鍋白旗と振て先隊せんたい八十餘騎小松原より突つり真鍋の兵田賀井左吉右衛門一番槍しやうと合せ一揆と追立る惣軍そうぐん乱討らんたうく一揆と海へ追浸おしひり討取數多しやうく返り來る敵と真鍋の兵波防の芝手より鑊砲と伏て打立たてた防ぼぎりし敵船てんぶねさうりして逆の沖おきより引退きあくる可寄氣よき色いろも多し一氏いつしの真鍋が働如何と思ひ蜂須賀小六家政くさく庵あんと林はやしに二に千餘騎差さりて迎むかへ遣つかりし真鍋の思おもひに勝利と得て妻子と引つと蜂須賀と打つと岸の和田より朝鮮の役やくに加藤清正の陣所ちんじよ糠ぬかを馬と飼かり苦くるりしとあり清正せいせい聞きて糠ぬかを藁わらと細こく切り大豆まめを交まて飼へと云いひし諸士如

教しく馬うまを能食よくたりて苦くるむる近世きんせい明曆年中江戸大火に依て人馬の食たり御旗本の士新庄内蔵助古老の士聞きけりしとありとく稻いねの蒔まり禿かぶと堀泥ほりどろと去いて飼かりし馬の力落ちる事と得えり

○慶長十五年の春参州田原より秀忠公田獵うと催もされ本多中務大輔九鬼圖書くきとくと仰おほり依より御旗本ごきほんより見物けんぶつせし圖書忠勝とくたけより向むかり勢子せし九六万も可有あり申まければ忠勝夫とくたけも四万二千も過まりしと申まり圖書某た見みる處と縣隔けんかくる違ちがひ心得こころえざる顔色かほいろより忠勝の曰いひ高山より平原へ押並おしなり人数にんずの小勢せうせいも多く見え谷やに集ありし人数と山上より見みる多勢も小勢せうせいに見みゆる物もの候まりしと申まりて打見うちみる處ところへ五万餘と存ぞんひし積たり候まりしと答こたへりし

○ 細川家の足輕の鑊砲口薬入草より鼻紙袋の縫用る支の急
あるとき至て指と以て捻り入る利ありと云り

○ 豊臣秀吉の智謀のこころは天運に乗らざる人あり織田信孝岐
阜の城を據て秀吉と拒むるを柴田勝家と約して秀吉岐阜と責
め我柳瀬より出て秀吉と決討んと謀る處あり秀吉こころを
己に岐阜を囲んとする前夜甚雨有て呂久江戸の河水激浪滔々
とまきと渉るるに河川此方陣を勝家柳瀬より出まき秀吉岐阜
とまきと柳ヶ瀬に向ふ洪水の故に信孝尾撃まらんと不能勝家の
謀に却て不意に遇ふ端とあり又甚雨洪水の秀吉とまきと出ま
き後小田原の城を囲とき城南の海上に海賊九鬼大隅守と兵
船とのり廻り田の手と合せしむ攻城の間五十余日一日も東風を

○ 若東風らしき舟を置きて成るる處あり其後小田原の海上東風な
き日ハ上様日和と云なきはせり

○ 源君あるはれの戦ふ久世三四郎坂部三十郎を遣り敵合の様子と
被令見向士御前を立ちまき坂部は顔色勇進とあり体よく退出を
久世は顔色不快その品悪し御前居らまき小姓の中久世は
体と笑ふ人あり源君御扈從の方に向けせたまひ坂部は生得の剛
者あり此故に敵を何とも不思議と心に勞まきとあり久世は生得
坂部は不及然まき勤励て武勇と働くと思ふ故少も様子二
方より生て有まきと覚悟するゆえ心に勞あり今見よ久世は坂
部より二三町もゆく働能見届て可帰と仰らる無程兩人帰
來坂部より久世四町をゆく先達く能見届て敵のゆうまを申上る

源君そのち右の両士を評して久世の心剛きを知らず生得の剛
有ものふ不劣と励むゆえその働一際踏あはる處有て奥あはる彼
か武功のいつくも成易きものと覺これば怠意ありて不鍊處あ
り仰らる品替りこれども是より同一のあり観世左近の謡よ
名を得たるものよと剃髪して安休と号し人語て謡よ三病あり
声の能と覺のよきと拍子の能きと此三事備るもの多し謡よ
不成して止むと器用をたのむもの自満しと此をわく工風不
積功勞と不重の諸藝の奥意を知らざるなり

○
秀吉黒田如水とて豊前國の封ぜらる日隈の城に一揆あり如水
の嗣子甲斐守長政兵を突く攻亡しと此外所々の戦い利を得て
武威廣大あり然るも紀伊谷の紀伊弥三郎鎮房の不従その

勇畧逞きこと等倫さる人なり長政是を攻んと望まるといふも如水不許
之長政本意なきこと思ひ如水の忍び密に紀伊谷へ取懸りて責之
紀伊の兵勢盛んなりて長政の士大に破き討つもの數を不知長
政馬と深田へ兼落して鞍爪まぐ泥に沉しとせんくあり長政が
馬ハ大竜寺と九州一の名馬なり長政今この馬と捨敵に奪ひ
くことと口惜く思ひ捨兼する所へ菅和泉守政利見て我馬と長
政に進りて行歩立を成し引んとし長政菅が馬よのり大竜寺と
敵に奪はるといふ甚耻辱なり引上り來りて退る菅の跡よのこ
りくさまぐとさすも大尺ある馬の深泥に没しぬき如何と
もあがぐ菅今せんくあく片々の鎧とをぐり持入り隨分
と存秘術を盡し候ととも七八人の力ありて難揚候も鎧と片々

取歸候とて出いけども長政計ひぬと感ぜらるる如此證
多きとき敵を奪ひ取らるる人の疑を得るものなきはくは
らひて虚説の譏あらうらんか為あり

○加藤清正の士あるときの城乗の金の慰斗付の大小をきつて堀とこ
ゆる後ろより尻を押上るものなり我を押上るよと思ひ乗上り
後に見まを慰斗付のきやと切廻し金を取らるる人よ油断
し沙汰も清正が曰城乗を心して後ろを顧みざる勇士あり
但金のや付と指する若輩の故より戦場へきまうの美麗なるもの
と用ゐざることを不知と覚ゆ未だのゆゑ若者ありといふまじ
まゝ或陣の野陣より昼辨當と遣ふ或兒小姓腰兵糧を不帶と
の伯父焼食と分ち與人清正これを見て少年の花車風流もとき

○
まよき陣中より兵糧を持さるる武備も怠り過代に馬を取上
るごとく無馬を取上伯父若年の心をも付て教ゆき武備不
令勵科甥も同く是も馬を取上らるる

○直江長谷堂を責るとき義光加勢を伊達政宗に乞石川弥兵衛
兵衆二千余騎をさうとて遣はし石川兵を三手に分て長谷堂に趣
く戦ふ及く寢上勢石川が兵を上杉勢と見違て味方討つ遣ひの
多し石川始我一隊の相印を寢上方へたるとさう故より援兵
もさきまの先相印を示し制禁を問ふと定まる軍の法も知
慮への及さるる然るに石川拙く無益の兵衆をゆるがさ
まじり

○赤井悪右衛門の本小身の士も武畧を以て漸盛ありて此

○ 丹波半國を領す但馬比賀美一將あり二万石なり驍勇なりと云ふ
要害の地を前々當て拒げしむ赤井攻まらざる利ありは赤井古への
兵書を讀み地を攻く人を攻むと云語あり是れ心を心得て彼勇將
と要害の地よりあひき出一戦り大勝し其首を斬る地を取
勝負の理少の競ひ後あり長久手の役源君討勝なまらば秀吉の師
あそむる色あり秀吉衆を督みく出て戦んと勇め立ちしむは衆
奮激の氣を生じ源君の兵秀吉の目餘る大軍を見し驚きしる
體あり源君明日軍中し令し馬揃をいたすべ味方敵を吞の心
を起し良將のさる所知んぬべし

○ 大坂夏御陣五月五日のあさ真田左衛門佐幸村が物見馳歸りて旗
三四十本人衆二二万なり國府越より此方へ越來り候と告こ

伊達陸奥守政宗の軍勢より真田が士卒もさるや此陣を押し出
たまふくも勇む氣色ありさきふも障子に靠片膝と立居りし
静に答く左あんとづりし外に言をた出さば午の刻計き
物見馳來り今朝のさる旗色より候り二三本見え人数二万計
松が故不分明候が竜田越と押下候と告是松平上総守忠輝
より幸村虚眠し居けり目を開きしり如何程ゆこをせよ一
所集て討しむる心地よりんとのとく是れ取合ぬ有さまあり
けしむ皆早し心も稍静りぬ是れ大敵と不令忍味方駿がりめざる
とのこもあまら夕炊然てのり此備所の戦便りし敵近く寄
らんとく一万五千余正奇と不亂前後と不混騎歩次第とく
押出せ敵假令十倍ありとも恐る不足と思ひ其夜道明寺

表陣とて、明き六日の早且野村辺に至り渡辺内裁助乱れ幸村の先達て水野日向守勝成とて、乱れ勝成と切靡ること五六十歩勝成又守返り、乱れを衝退る互に刀闘三度、及で乱れ深手を蒙り、脇に備を引取ると多く立直り幸村へ使を以て、只今の迫合は、疵を蒙り候ゆへ御人数駈引の妨と存脇に引取候且横を討んとする勢を見せ候へ、味方の一助とて、申遣ま幸村御働目と驚候是より我等受取候と答へ、備を進むとて、正宗の多勢蒐りきく野の地形前後の岡とて上平あり中間十丁ありひきく、道左右田疇に連なり幸村己の兵を前とまると、令を下し、曹と着せ、槍を取せ、馬の傍にひき添つを、下知せん、とて待せり、敵合十町あり、りき、幸村使番を以て曹と着せ、と云爰、於て皆持せ置ける曹

と取て打着忍の緒を、けき、勇勢新にかり、兵氣ま、盛んあり、敵合己一町あり、と思ふ、幸村又使番を以て槍を取、諸士手々、槍を取、穂先を敵方に差向、面々、ある堅陣、剛敵あり、と打碎んと別、魂を入、此に幸村が先手半過岡の上、押上る處、正宗の騎馬、鏢砲八百挺、先手より一三町も前、一同に打立、鉛子の飛、如電火、薬光、電に似、煙の忽雲霞とて、丈尺の間も見え、幸村先手の士混々と打斃ら、死傷もの多、一足も退心のあり、曹と着槍を取、氣勢の壮、故より幸村煙の中より先手、爰とて、大事の場、片足も引、全く可没と下知、声耳に徹し、槍の柄を、平伏あり、幸村下知、砲声此

絶間、十四五間をどつ走り行居敷砲声の絶間、まさしく如斯きこの
 とき幸村が槍さねより一尺進み、さるの何となく今日第一の功とせん
 言ひ一人も此先に出るものあり政宗の騎馬、鎧砲といひ、伊達家の
 士の二男三男、壮力のものを擇て本より仙臺の馬所より駿足と勝り
 のせ奥州、く所々の戦、馬上より鎧砲一放と定て打まゝ、不中
 玉の希より打立ち、備へる處と煙の下より直に衆込で駈り
 散まゝ、馬蹄を蹂躪せしむ、敵敗潰せむと云ふ、此とき騎
 馬、鎧入の士馬を入さんと駈寄ひ、幸村の先鋒近々と備へ
 折敷、うと見く漂ふ所、煙も稍薄く、幸村此を合とや計
 けん大音上再拜を振て、蒐むと言ふ言の下より、起立て直に突
 政宗の先手七八町追崩せり、水野日向守勝成正宗とまゝ、復戦

ハ、政宗我軍さ、労まゝ、戦今日に限る、不従勝成ま
 忠輝を勇まゝ、不果勝成ハ小勢あり、獨た、不能
 て止ぬ、幸村未の刻ま、合戦を待居、夫より繰引、引
 其体肅然、追討、不能慕、却て為彼、可被挫、東軍の諸
 隊見るも、此感賞せり

同陣五月六日、木村長門守重成若江、陣を勇ま、生付、陣
 數、不鍊持、持口と不堅、て爰、敵有方、向
 と、八尾、爰も敵あり、本の陣、歸來、井伊
 掃部頭直孝の臣、磐若内膳物見、出て重成の備未、立
 敵の虚頭、候里程、つより夜更、不出、八尾、行て、今爰、可來
 や敵、道、疲、兵糧を遣、遣ん處を討、利、と使、立、直孝

心得し軍を前め藤堂和泉守高虎と首尾を交討て大利を得し

○同冬陣、越前黄門忠直の手比仕寄と付、夜入く長竹を以て付寄らん城中より銃砲高く打出し士卒一人も不傷是石川數馬がハる處より人譽或老士らとを聞く城中の銃砲の昼能々あり込土俵を以て究之とき闇夜とし人とも外るると不多あり城兵を不知し石川が名をよめるものあり云

○信玄の士小幡豊後何の戦より敵地より物見よ出たり一が帰路を敵と取切らざり豊後猶静に敵合の様子を見終り帰らんとせると敵兵追之豊後初通る道より遙隔し在り池へのり込馳歸りて敵の虚ありと申せば信玄則兵を前て利を得らざり伊達政宗の士茂

庭周防或とき物見よ出伏兵に囲まれて討死を不逃走の茂庭が勇ありと譽らざり或人聞く物見の敵を見く引取ておとらざりありを介候ハ軍の勝敗の掛る重任ありとを譽らざりその道と不解る故ありと云

○肥前島原の役、賊ハ有馬の古城に據り守城を寄手の諸大将大手の門に付て責らざり賊門をひきき突出り敵ハ高陽の地利に依りて寄手を少し押立りこのとき寺澤兵庫頭の旗奉行山路将監百石兼てより旗差を令り道端に生立り木を令取付ていつありとあり此木を放まざり堅く捉へ居り合置けるや崩るる勢に押立らざり他の備ハ敗軍に押立らざり旗色靡乱し寺澤の手を全きことを得し

○ 松倉長門守勝家ハ島原肥前國則の賊のてん依く身上滅亡せり
勝家の士飯村助兵衛と云々の浪々しく藝洲廣島松平安藝守
光盛の城下より来る廣島の諸士高原のてんを尋聞く或とき天野半
之助飯村の城中より長洲の手へ夜討へるやと問飯村答てそ
の儀より松倉家ハその備尤嚴しく雲火を投外聞を出し夜打ふ
とい思ひよと云天野笑て長洲の家も未よりくこの意を解ま
る人ありしや古老の士ありて左のちりまに夜討のくるやと云
てこそ大利の有と云へり天野ハ始源君の御扈從より中根左
源太と号を傍輩の士と口論し出奔し後大坂の役道明寺口
て松倉豊後守重正より属し勸功ありけむ御勘氣と許さし浅野但
馬守長盛より仕祿二千石光盛の代より奉仕せり

○ 同陣二月廿一日の夜城中より黒田右衛門佐忠之鍋島信茂寺澤
兵庫頭の三手へ夜討を寄手數輩討死し鍋島の手と竹東井樓を
中拂ひ賊の勢甚つと注進ありけむ江戸御城へ尾州紀州水戸の
三家其外在府の諸將を召しけむいふこゝを聞て驚色あり紀
伊亞相頼宣卿のて近日落城せむ鍋島家の井樓に火をく
様子城中知畧のて心と勞を不足久く吉左
右あんと仰らる程落城の告ありし人皆頼宣卿の
明察を感ぜり

○ 大坂の役より源君渡辺圖書より加洲の陣場を見て参まると御使よ
遣さる渡辺竹東の竹一本抜て三尺二寸五分切墮際まての間
と打て委細言上を城より矢玉を飛まも不中後より源君與

カ三十騎同心百人とあつたなり

○寛永十四年肥州島原の賊あつたとき寺澤兵庫頭の士賊と河内浦
にたつて寺澤家の鏡砲の将足輕を下知し打たせし立あつて令打めん
悉北走る偶打放す敵と恐むて面を上を俯打めん鉛子の虚空に
とんと賊に不中並河九兵衛の足輕と下敷せ膠架にて打せりわん一
人も不得退隊不亂俯て放せし鉛子不高と他の足輕の打と異なり
こと定むる法ありて左の奇策とゆふにちあつた大坂落城元和元年
よりふるときまぐ年月相去ること廿三年の間も武事疎く如此
況や泰平已二百有余年常是を論し是と習とも或は其傳亡其理
を違へて未迷ひなきこと不能必ありせしむるべし
○同賊有馬の城に據り諸將困責るとは賊強して寄手利あつた上

使板倉内膳正討死のりち松平伊豆守信綱の下知とて責と止り
竹束と付寄田とて數重只とてか変と待て不戦伴助右衛門と号ま
る浪士黒田右衛門佐忠之の備と借て居り永陣の間諸人氣
かつて勇氣と脱意を伴ひ昼夜物具と不脱整と枕とて臥せり程
に相陣の者目悟り死にたつたにちあつた今此大軍に被田竹束鹿垣
の内に入らんとて賊徒多く切入りて共物具と着せし隙なき軍
やあつた余り心がけとて精根つきたる城中糧盡く死狂の軍に
何の用も立たざると云合り翌年二月廿一日の夜賊黒田の手へ
夜討に一揆の勢千百人芦塚忠右衛門布津村代左門大将分て押
寄り何の陣も思寄に周章不斜上と下へ混乱を伴へり甲冑と着し
槍を放さば有りて一番に走り出竹束を破り押入り敵を突伏く

二人討り此とき未だ味く一人も来らぬ賊柵越し伴が右の腰車と
 其槍を握り引取り所又一人伴が左の股と突く是より奪ひし
 槍二本を得し腰の疼痛手よく立揚るこ叶は既に討
 り伴が僕肩より小屋より同廿八日落城する件の疵と痛て手
 不合後平愈せし忠之伴は禄八百石與へらる伴辞く臣は先知之
 く且武功とく偶此度御恩よく御備の端は被差置少々疵と
 蒙るまの操あり過分の禄と賜る身は幸甚しくしども手疵
 深手ゆえ未愈自由の働心元々候へば自然以後御用あらんとき役
 可立やとの段より御免と可蒙候と云忠之怒り彼が心中
 知高不足と思つるらん我陣と借出陣せし上は我家人より臣とく

主命を背く罪軽うらむ彼が言ひ理ありて實る然まじも武功と對
 存分と止るも他家に仕へく士職あること許さる追出され
 う程経く江戸殿中より水戸黄門頼房卿忠之に向ひ我大望あり
 叶へらるべきや否や仰らる黒田何事ゆへ承り候んと諾せらる頼
 房卿笑ふく先々令満足候と謝し別儀ありを伴助右衛門と申
 浪人足下構あるは是を許され候と仰らる忠久辞まらる術お
 くく諾を依之伴は水戸家仕へ禄二千石足輕三十人預まり

○

同落城の砌細川家の足輕陣佐左衛門と言ひ此の丸の辺に鏝
 砲の中り死する者の首をとり首敷の中へ入置り忠利前髪付の
 る首は別の所へ并べ置り令く類を分ち忠利鞭をり陣か
 得る首と差示し若し此首賊將四郎が首と言ふべきもの見

知る者ハ多キヤクあり須佐美權之丞見知候と云則呼て見する
須佐美能見届けく四ヶ年以前四郎と半年をり召仕候依之能見
覚候第一の印は左の耳の側ハ瘡あり是可疑もあく四郎が首あり
と云然らむとく生捕らる四郎が母を呼て見せしむ一目見て落涙
我子四郎が首ありと申忠利則軍鑑畑忠庵と呼て大将の首と
髪の結様替ありと聞く其通り畑答て如命大侍常の如く結て
鬢の折と下へ折候と申せ忠利下部の者今しと首の髪と令結仲間
馬槍抄の水と入來件の結終りけと忠利使者と以て石谷十
藏へ此首大持四郎が首は似候故先進候尤不慥猶又御吟味可有
歟と申送らむとけん十藏則使者に對面あり吟味の趣を聞届こと
上ハ訝しと云去らむと猶も生捕り可尋とて教人別々引分

て問之は皆四郎が首ありと云り十藏も上使信綱も相共忠利の陣に
來り手柄を被賀飛擲を以て江戸へ注進あり陣ハこの功に依て新知千
石あくらと云り

〇

摂津半國の主松山新助が勇將中村新兵衛度々の手柄を顯しけり
時の人は是を槍中村と号し武者の棟梁とて服折ハ握々緋盤ハ唐
冠金纓より敵を見てもつや例の握々緋ハ唐冠より未戦ハさる
先ハ敗れ敢てむらむらと云り或人強く所望し中村與之を
の後戦場ハのこ敵中村が服折と盛くと不見故に競ひく切崩
ま中村丈と振く敵と云ふと許多と云ふ中村と知さむ敵恐
ま中村つひに戦没を依之曰敵を殺すの多を以て勝ちたる威を
輝し氣を奪勢を撓その理と曉るべし

○大坂陣のとき平野村に失火し旗本の面々馳聚る安藤治右衛門後より皆問如何我等は先手と心もとく存行向く見く参り候とく可参を旗本の別変らるる若変らるる先手ありと思ひ馳行候やえ往還の時うりて遅参し及び候とく心を皆その心みと稱す

○大坂冬陣に松平武藏守利隆は神寄し軍に弟左衛門督忠継は厄崎に軍を忠継入衆推出し矢野兵庫佐分利九之丞と物見とく現江の地形を現しむ二士飯て両方沼るく前狭く未廣く身方の為る利鮮く敵の為る便ありと申をまよ由井伊豆丸山豊後渡瀬淡路を差遣む三士の却く味方の利ありんと云忠継矢野佐分利と相齟語を以てその故を問う三士君公人数を推出させたまふ合戦を望ませらるる非ざるや身方大軍あるを見く敵

地の利ありきとき必怖て出べくに君公合戦を挑まるとも得べけんや敵地の利を頼みて出を處と身方の大軍あり長々と出さむて後急討之勝とらんの内は候若人数と向らむ早きと善とを利隆公の備へ續候る敵見を多く未戦に引返し候ると申せし忠継汝等云所尤ありとて造作もく敵を追拂る利隆の見之勇進むる目付城和泉守永盛源君の命ありと云て強て制之利隆憤り抑て兵を收んや否やと思惟する處に阿部四郎五郎諸手を巡てくる来る利隆の由を告らるる阿部兄弟の身と云眼前の敵とし忠継若く不克は是兄弟を棄るあり忠継又克之は是自法のそと取り多し両あはる武家の恥辱をれば只進み不知と云一言よ力を得る永盛制もく不用利隆の

て飯る正信以下座より人々大に番を嘆美せり

常山紀談拾遺卷之四 大尾

常山紀談

附錄

完

東 京 圖 書 館

一 五 冊	二 六 號	五 三 架	三 五 函	雜 史 類	和 書 門
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

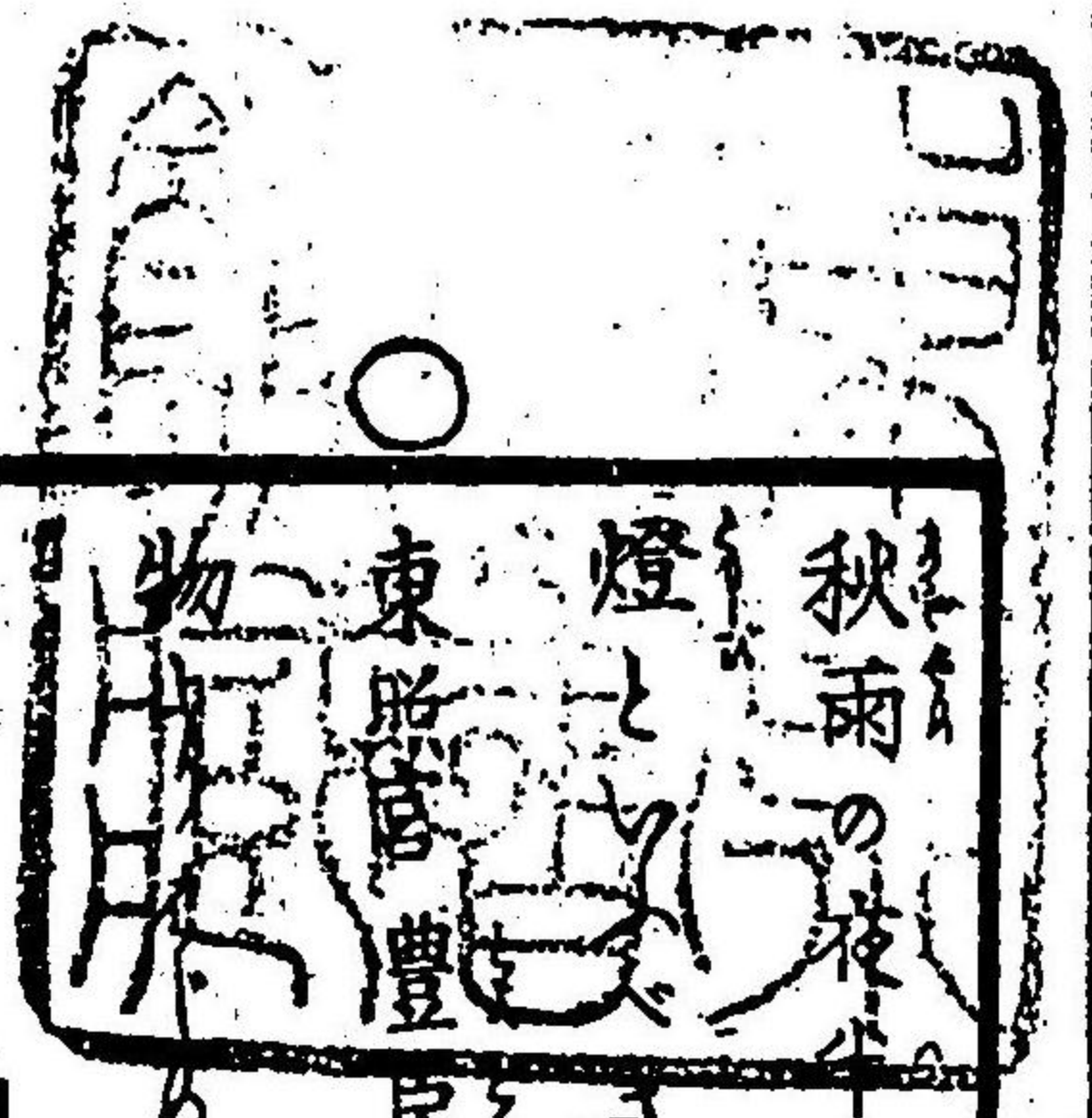
常山紀談附録

兩夜燈目次

- 一 東照宮豊臣太閤御對面の時此事
- 一 東照宮花女と御使より台徳院様へ菓子と進せし事
- 一 新太郎様夏目氏の忠死と御賞歎の事
- 一 本多三彌木下肥後守義經辨慶と批評せし事
- 一 板倉周防守大猷院様へ草鞋を献じし事
- 一 芳賀内藏允忠功の事
- 一 飯田角兵衛其主肥後守と諫めし事并新太郎様備後守様へ御教訓の事
- 一 松前伊豆守用意の事

- 一 古の名將學問和歌と嗜む事并酒和田喜六器量の事
- 一 武邊ハ律義者一ありといふ事
- 一 常憲院様越後家の訴訟御睿断の事
- 一 土倉市正中村忠左衛門と勸め事
- 一 毛利元就大内義隆一諫言の事并熊澤助右衛門格言の事
- 一 稻葉一徹文學一依て死と免事
- 一 中院内府幼き宮一後見の事并本多佐渡守謀計の事
- 一 名将一ち質素一して下情一達せし事
- 一 威愾一以て國と治りし事
- 一 佐藤五郎左衛門咄の事

以上十八條



秋雨の夜半一寒燈と剪て古き物語と書集めりきを是るん雨夜の
 燈と
 東照宮豊臣太閤一御對面の時大閤我所持の道具粟田口吉光の銘此
 物一
 りて天下の宝といふものへ集り候とて指と折敷へ立申
 ささきさく御所持の道具秘藏の宝物へ何う候哉と尋申されひ
 ちるくの物無御座由東照宮 仰らるひさそ仰らるひまの我等一
 へ左様の物無之候但一我等と至極大切一思ひ入り火の中水の中へ
 も飛入り命と塵介とも存せぬ士五百騎所持しつゝ此士五百餘と
 召連候へ日本六十餘州恐一敵ハ無御座候故此士とりて至極
 の宝物とせんト平生秘藏一存候由御答ありけり太閤亦面一を
 返答ありけり

○ 東照宮 駿府に御臨居遊さま大御所様と申奉る台徳院様江戸より駿府へ御出るされ二の丸に二ヶ月餘り御滞留さまひ節東照宮阿茶の局と召して將軍より年若き人あり旅住居二ヶ月より夜中伎然多るる一花と使し葉子とせ裏道より忍びやうしやまのり慰し成ぬごころ我云く聞くも隔心ありて汝の心得よくそくんと仰らまはれ阿茶の局御心の付く上意ありと御請て花其比十八歳女中第一の美人ありを殊に取繕をせ下女葉子とせ初夜のころ裏道より密に参らせけり内々阿茶の局よりくく申けき台徳院様御上下とめ待せたまふ處に花参りて御庭の戸とれとくせけき台徳院様御自身戸を明ら花と上座に直し葉子と御取是の大御所様より下さきとるる御しとまきあき花早

○ 帰らまはりて仰らまはれ先御立まき戸口まき御送りまき花兼てと違ひくくの詞もき帰るくうくありと申けき東照宮聞し召將軍の律義第一の人あり我をいごとくけき及がしと上意ありけり

○ 三河國箕形原の合戦に東照宮御負まき濱松とさして御人数崩まは時甲州の士大将秋山伯耆下知く黒鹿毛の馬に乗りて槍をかりて再拜を腰にさ一度々取て返を武者振敵の大將や東照宮追つめ討取まき急追くけり御馬廻り残り少く討まけまは東照宮より御討死の覚悟まき御馬を引返さし時夏目長右衛門より御討死の場候も早御退るまきと申て御馬の口と濱松の方へ牽向け槍あつたり御馬のさんづとま

うけて抑きけき御馬より出て敵と遠ざりぬ長右衛門踏らり
敵の多勢取まらぬ槍の柄のさしやど戦ひく討死しけり大猷院
様の御時御悦事なりし諸大名出仕りて徳川の御家御繁昌の
ことさかしく物語ありしとき新太郎様備前少将
光政朝臣や暫く何の御詞
もなく御座ありしとき夏目長右衛門箕形原より東照宮の御命
代り不申のうらうら御繁栄の御座あるまじきより仰らるし大猷
院様聞しり徳川家の士此節義の心と今更引起し詞より智
者の一言はるることありしと大方を御悦よありけり
○
本多佐渡守の第一三弥と申は以の外は直言をいひ出を人あり
台徳院様御奉公申上げり或時東照宮三弥はよくを承るもの
ありと上意あり其後一万石拜領あり東照宮三弥を召料簡と改

り人柄を嗜む故ありしと上意有けり三弥承り將軍様の殊のり
御奉公申上能御座候あめ如くある主君より移申は氣違ふと
申上げらまはれ東照宮三弥が持病又ありしと御笑ふこと
又或時幸若八九郎高館を舞けり御上覧の節武藏坊辨慶の
世は勝まらる者あり今の世は少くも東照宮上意ありける
と三弥進み出判官殿のやうある主君ありしと申へり辨慶の御座
ありしと申さるる曹源寺様松平伊豫守
綱政朝臣の御時御大名中御振
廻の席より辨慶の事御物語し出し辨慶の事と評判のありけ
り木下肥後守末席よりソヤ其辨慶少ゆり御座ありし判官殿
の料簡より申へ私の家來に残らば武藏坊や佐藤兄弟より
可申候とまゆ何ぞ判官殿よりありや度と久しく心掛申へども

三

ま心得ありやまに口惜く存めよしひ出さましるを曹源寺様聞
召唯今の肥州の理窟に拙者父新太郎が常申する事うくは能き
且那より度と心掛り多く種々工夫しゆくども能且那より成ひ道合
点つ了不申書物を出し学問仕ゆく能且那の道知を申へくと一
心不乱よぞんじ極めそまより思案分別致し古の聖賢の掟と稽古
しつゝ寝てもさめをも忘れ申さば少し且那より多し道と合点し
しひと拙者へ申聞ひ日本國に響き渡りゆく御存の新太郎を如
是しきりゆする段と今の道理と一つ事うくひくは肥州より新太郎
流と申りのましひ此上の道理有之ましりくましく御賞美ありける
と書
板倉周防守重宗大猷院様よりつづ一足献上ありて是を東照宮

軍中より申上りて上意をましひを能覚し作り習ひゆめま
て御座候故差上ひり御用は御座ひつりゆども献上可仕とぞ申
されける是は東照宮御少身より御成立遊さし賤き下々の情とよ
く御存するまを邪ある人のしひなき御取合遊されむひやま上下の
志相通し下々怨る者多く終に日本の主よまをましひ今日本を
しけ保ちたまへども下々の情よく知し召まを叶はざらとらふとを
つづつよませく申上ける心とぞ

○ 芳賀内藏允ハ少身の比國清院様池田三左衛門の御右筆より國清院
様美濃國岐阜の城と御政落しよまを東照宮へ御勝軍の御注進
状と内藏允に仰付くま御書せまを御沐机に御座るまを候節
城中の塩硝藏に火入て薬飛出ける音懸し事ゆく山の崩まを

ガゴ〜人々大ニ驚き騷きうろたへ〜内藏允見向もせば少〜も
駭く休あり〜國清院様内々感ト思召り〜御試
一唯者〜知行二千石下され御寵愛あり大坂陣の時
天満橋御攻口あり〜御先手須加左京竹〜と付る〜御人数
多く御加勢下さ〜と申上〜内藏允一見分仕ひ〜
院様 松平武藏守 仰付ら〜内藏允苗染の羽織を着て馬〜
利隆朝臣 仰付ら〜内藏允苗染の羽織を着て馬〜
て見分せ〜焼跡の土藏〜を楯〜を扣へ居り橋より上〜印の杭
の候見分〜と〜内藏允心得ひと〜と内藏允一近頃取立
ら〜出頭の首あり右筆〜の武者振見〜さ〜合〜居り
内藏允馬より下り〜川岸と行と城中より銃炮と打〜る水
一響きて殊〜烈〜聞ゆ〜も内藏允ち〜も騒が足教と〜く

て歸り〜各〜の申さ〜分の通る可申上〜御旗本へ
〜後番大膳と兩人〜御仕置仰付ら〜大膳ハ遙〜劣
〜願可申品有〜大膳言達〜事能可濟ヤ〜答へ
〜興國院様の御前〜十分事の訣と得申述べ又内藏
允一言達〜内藏允色〜久左様ある事且那へ申さ〜の〜
ら〜拙者ハ得取次致〜と荒ら〜申切〜御前へ参〜事の子細
と申上御聞入る〜烈〜御せ〜合と申〜是非〜願の〜
〜均と明〜後其人と呼〜せ中々御聞入〜さ〜
〜申上〜御上の御慈悲〜御聞届〜と聞ひ〜
〜度々御前へ御諫と申上争ひ申〜と幾度〜事
一後〜是と聞傳〜内藏允御為と思〜と大膳が及ぶ〜非

まこと賞美しむるやはは是を以て案さるる大勝が東照宮の御
前より命を棄て申開きしやせし一且の事とて仕能きことと
一國の仕置に極めり大事ののりも大勝が一且の骨折とていふ
べしもなき内藏九か忠ありて

○
文祿年中朝鮮より虎と引來る鐵の鎖とつひ両方より七八人取付て
引けり朝鮮先陣の諸大將と名護屋より歸り集らるるとき彼虎
と大力の男あまひひきりどろと云てけり出さるる居らるる中を通り
けり人々皆驚き駢立する處に加藤主計頭正藤立直一拳を揮り
臂を張くまると睨まき虎もさかへ踏留りて清正とていふと通り
けり加藤左馬助嘉初より壁よりこれけり居眠りてあつて虎
の通りつる後暫くあつて目を開き何事と駢らるるや虎と牽通

る故郷と開き言きしとぞ主計頭の子肥後守廣も大に父に劣る人
あり或夜近習の士と物語りて我に大力なる度思ふより重き具足二
領打りき袷着る軍に出る鉄砲の恐る事とていふと云き
と飯田角兵衛ハ父の時より奉公に度々武勇の働有ける老功の者
あり是を聞き進み出く先殿様の御具足一領とて志津嶽七本
槍の武功より幾度となき軍に御出さるれいへども終に薄手も負せ
たまふを朝鮮國に攻入りて鬼將軍と異國の人も恐き奉りひびき誠
に死生に天命を御座候用心の分別を参るることとてあつて但し
く戦へ生き悪く戦へ死まると申古語のい國中の百姓と随分
いふ家の中の士能心服し奉りまづき従ふ時の疊の上へも
軍の勝負の道理明く分り故軍の場に至りては千万の人数千

足をつらふが如く、まさしくはけきぶ御家中の士の着申は具足ハ皆大將
の御一身ヲ打つけね召まふと同一事とて御座ひり御家中の士心
ざら離まひひまふたとひ百領千領御具足を召ひとも何の御用も立
可申はや歎くき御一言もいとひひく退出しけるが先殿も何とてち
まきくろふ劣らせひくやとて声を上て泣々出けるとぞ其後忠廣滅亡
せきせけり近頃も新太郎様の仰へ取傳へたる大兼平何の用り
立べき家中の士比刀を残りて用も立させあんま向ふ敵のあちまド
大名の身も刀一腰を頼りせん口惜き事の至極とて備後守
様へ御戒ありと飯田と同一理とて
松前伊豆守元祿年中京都町奉行勤らまし時海保友竹とりの畫
師参り紅梅のよき開きを生置ましと見く御所司代並にまじり様

あふふの初花見アきだてアひりて伊豆守とてくの返答あり
落涙せりまけり友竹ゆりゆり故やと案居るまやあつて触る
いそぎとて誠上左様あり我等不肖の身もくくる重き役義と
仰蒙り威勢ありと知らむとて心付ざるの大きき油断あり是
付ても大事の役をと思へる氣遣ひも落涙しとていそぎとて
假初の一言もゆるく心と付らまし古の君子の道ありとて此入
の仁徳京都より後まを申傳へけり
太田持資後道灌上杉の家老あり鷹野より出て雨よりあひ百姓の家
入る簾をうらひとて云まき若き女物の何ともいふたして山吹の花一
枝折く出るとまき花とくまきとつてあしとて腹立と歸ら
まし是とまき一人のとまき

七重八重花のけけと山吹のみのひらうてりるまをうりさ
 とりくも古歌の心よく装ふきと申さるを云く知らせやしるまうとやけ
 きを持資駭く吾是あづの事とさ人知くは百姓の娘の劣も事口惜
 とく其より書とよと歌志とよとせまきけり下總國ノ軍と出まとも
 山涯の海邊ノ山の上より石弓とよと潮港へとて通り難うるべり
 如何とひびりとも折節夜半あるも持資の見たる来らんとも馬と乗
 出りけりか其まき帰り潮と干うるとく軍と押通さるるこころ
 遠くも近くもあつみのを宿千鳥あく音ノ潮のこち干とどりる
 とよめる歌あつそまを思ひ出りて千鳥のこえ遠くまをえとも潮北
 干さるを知とるとあり又退口ノ利根川と渡まとも是も夜半まくと
 さいんく〜りづるか浅瀬あつ入まると口々ノひびくも持資

とよひもみ淵やのけけと山川のあまき瀬こころとあど波とよと
 とよめる哥あつ波の荒き所と渡せと下知り難く浅瀬と渡りけりさ
 き昔より武将ハ必学問ノ心とよせ歌のこちと知たまひたり奥州の合戦
 八幡太郎義家安倍貞任宗任と攻く衣川の城と追つたまひり時
 きこもくも後と見まうやのひんてん
 衣のこころあつらびりけり
 と云うたたまひり貞任とらを振むけり
 年とへ〜糸のみとまのく〜

と付うけまか八幡殿とがさる箭とはしとてつたまひけりとも
 烈しき所あり〜つづけることゆり〜やち〜事あつ〜斯も八幡殿
 上京の後宇治の関白殿ノ参り軍物語ありげり〜中納言匡房卿

聞て器量ハクハヒキミトモ軍の道ハ知らずトフヤヒキケルと八幡殿
の郎等らうらうらうらう事と申さざれば八幡殿やっぺん子細有
グハクハ匡房まがらふの中納言車くるまノ乗のりまける所へ参りて會釋有てヤク弟
子こノまうて学問がくもんしたまひけり永保えいほの合戦がくせんハ八幡殿金澤かねさわの城しろと攻りけり
とき一行いっけいの雁かり北きた苅田かりだの面おもてハあんとしけるハ俄はな驚おどろき飛乱とびごりけり八
幡殿御覽ごらんト馬うまとひりて中納言殿ちゆうなごんノ学問がくもんハ兵法へいぱうノ鳥起とりあ者もの伏也
といふとやう定めり伏兵ふくへいありて野のの三方さんぱうと取巻とりまきハ案あんの如
く三百余さんひやくあまりの伏兵ふくへい居ゐりて攻破あつぱらるるハ八幡殿学問がくもんハ心こころとよせたま
りけりあつちあつちと知したまはるる右大將うでだいしやう頼朝よりとも卿きやう和歌わがノ心こころとよせたま
ひ近ちかき年とし信玄しんげん謙信けんしん兩人ふたりとも詩哥しこを好このむたまはる蒲生はまのぶ飛彈とびだん守氏もりうぢ郷ごうの
伊勢いせの松寄まつよ十二万石じふにまんごうより奥州おくしゅう會津えいしん百万石ひゃくまんごうと太閤たいかうノ拜領はいりやうあり奥州

と切きちつめり無双むしやうの猛將まうしやうありけり極ごくりて和哥わがとよせたまはる
氏郷うぢごうの家いへハ佐々木ささきの鐘かねとゆる名高なたかき鐘かねありけり細川ほそがわ越中守えちゅうしゆ忠
所望しよぼうありけり家來けらいども是こゝハ名物なぶつとゆる別わかの似による鐘かね進しんぜん
と申まをしと氏郷うぢごう
あるき名なども人ひととゆる心こころのしるる人ひと
とゆる歌うたの心こころハ恥はぢしく彼鐘かかねを贈たまへり元弘げんこうの乱らん
ハ菊地きくぢ寂阿じやくあ入道にやうだうハ後醍醐ごたいご天皇てんかうの勅命しよくめいにて敵てきの城しろハ寄よりて掃はら拂はら
田での宮みやハ前まへハ馬うまのまはるる
まのふれ上かみ上かみ箭やのうづひハ筋すぢハありて神かみとあはるる
と詠よみ神かみ殿だんの大蛇おほいづまを射いり馬うまのまはるる直なり既すでハ討死うちしたまはるる故ゆゑ
郷ごうハ一首いっしゆの歌うたと書かけて遣はりけり

ふる郷にふりひつりの命もあはくや人のまきをまらけりん
とよしく忠義の為命を棄し皆文武の人とやにぞく大将まらけり
も非を名高き士の皆書を讀學問し和歌もよき申けり梶原の一
の谷とく

物のふれとつてふらあき早ひきく人のくまをものう
とよく奥州と頼朝郡攻らう時白河の関を越たまへ梶原
秋風草葉のつゆをまらけり君々のまば関とらうもあ

とよくけるころやまらけり學問し名高き勇士多し文武の二つあ
む詩哥と公家の玩物と思へり無下口惜きことあ近ごろ大猷院
様文武のまらけりある士と陪臣の中より十七人撰と出させたまひし永
井信濃守の家臣酒和田喜六哥人まら

芳野山花さくころの朝なくとらうくる峯のあはくも

とよくゆる歌を聞し召是も又文の一事あり喜六かまらやうあること
内々聞しめさきしとく彼の十七人の中へ酒和田と入らまらたまひ
り此酒和田まらや風流の心をぐる人ら非を林道春の聖賢
の學問も尋問けり信濃守江戸の留守の家の中勝手迷惑し
喜六願ひく金銀をとり度と云けり喜六則信濃守より
もやまら藏の銀子千貫目貸與へけり信濃守江戸より帰り大
腹立く貸まら何とく我等よ云らや我儘貸らこと不届
と申さまら喜六承りされが其事もみ只今私を御叱りまら
み御志と存ひゆえか上ひとくも御聞届御座あるまら兼て存ひ
上ひて御聞届無御座み押へ貸申こと如何し御座み又御趣意と

守りやみく貸し不申さまの御家中大に迷惑可仕上方の商賈町
人の銀を借て過分の利を遣一町人の利と取せむる無益のこと御
座候御藏の銀子を貯へ置し軍用公用のとりよむ御家中貧乏
と救ひ人馬とつぎを知行高の格を勤めすむる軍用の本御座候
こと公方様への御奉公と奉存ひ入大なる公用よむ且又御藏の銀
と出しひ少くも少くも御坐あは十年賦申付ひ間十年
の間本の如く返辨仕ひ上少の損も下大なる益御坐候
御家中黍々存る上の大益御坐候またく私を咎と蒙るも
とんど以外御用人の更存を私一人の所為御坐候間
も罪御付らむと申す信濃守閉口云傳へり加藤主計頭清
律義なる者あは武辺いせむ昔より云傳へり加藤主計頭清

正剛の者とる思ひ一生の間目利し心をつ人相まくと警古
致さむ其術と得らむ唯律義者武辺者多しといふこと
なり又加藤左馬助嘉明も申すは氣さねのけむがある者へ人
の目と驚くまむの働とまむとりど踏つらむ武功へ律義なる
者ありた人頼もる且那の感哀人々二心を持つ中
獨義を守り心強し律義者なり事あり諂ひ
者た人万一一旦の武邊ありて曾く頼もる且那の出頭と
心掛知行を取人笑つて恥と巴も知も其恥と恥も思ふ
者那と殺も身の為のよまも為と貪と品は
まども落着同一ことあり云まも新太郎様も常諂
ひ者知行とち置く盗賊と抱置と同事あり仰らむ

○ 松平越後守長子より家督の實の弟永見大藏ありと大

藏も思ひ又家中も大く是ぞと思ひ追従けり小栗美作あくま

で邪智ある者く御家督の大藏殿もあきと云人あきと左や

うぞあんと返答を大藏き傳へ悦びて諸江戸へ家督のいと

窺ひ美作行大藏も頼むるも暇乞事よせて念頃の休まり

江戸へ行才覚を廻り三河守を立て議定より一伯配所を

の子永見頼母と云其子と三河守より永見大藏へ頼母が弟あり

是も配所より生きたり是より大藏大日本意を失ひ家中日

頃大藏へ取入る面々もあきまじり然れども上意と披露する上

せんくも美作へ大藏を欺きりと獨笑り三河守をり立

權威と大に振ると思ひ大藏堪兼く移り入寇の面々徒黨して美

作と打果さんと萩田主馬と張本より美作空知らぬ振りて取合をさ

て美作の越後守の妹婿も美作の子の大六の越後守の姪あり一門の如く

家中の士敬ふと云はせり家中騒動して終つて江戸へ

訟へ数年決定せり常憲院様御代始御自身双方の公事と御城

殿中より聞き召御決断ありて越後高田二十五万石召上らる美作

死罪仰付らる子の大六の曹源寺様へ御預天和元年六月廿二日御屋

敷弓場の東作庭より是も死罪の仰付らる永見大藏萩田主馬の八丈

嶋へ流罪其外死罪流罪の仰付らる士数多あり此取扱は付渡辺

大隅守八丈嶋へ流罪松平大和守閉門仰付らる翌年二月閉門御免姫

路十五万石召上らる豊後日出るく五万石下さる松平上野介廣

瀨三万石の内一万石召上らる酒井雅樂頭久世大和守御老中職召放
さるべきにこそ皆越後守暗弱く威を家老用人に奪はせ欺くまじゆえ
あり常憲院様の庸断異國唐の玄宗と太平の天子と申しよとぞ
と其節より諸國畏き服し奉りけりともあり

池田家の御家老土倉市正の四郎兵衛が養子より實は瀧川左近將
監の先手の士大将岩田小左衛門より新太郎様御使番に誰り可
然と御吟味遊さる未決定せむ市正の御尋ふまじゆに市正承り
中村忠左衛門可然奉存ひ忠左衛門と私とも對し毛頭も詣ふ心
のあき男よりいふひあひのさる者より仰甘らまじゆに誰り外に
あまじゆと譽立けまじゆに新太郎様御機嫌大くさるまじゆに忠左衛門の使
番を仰付らまじゆに日ごろ市正と忠左衛門と大に不和あり御前

ての様子と忠左衛門の語り聞せし人ありけり忠左衛門日頃の不
和を少く後悔の氣色あり又此より市正の語りける人けりけり
ハ市正御尋ふより能人を上ひこり御國の為より毛頭も私
の慮あまじゆに不和の本の通り此不和を忠左衛門を
吾心を知むとけり此を家老の職分を失はぬ人とすべ
し君より臣よりといふこと誠あるまじゆ

大内義隆ハ周防長門豊前不殘領國より安藝石見も領地より大宰
大貳を兼するゆえ筑前も下知し隨へり周防の山口は居城してその
比并あまじゆ大名ありけり漸武備を怠り遊山を樂み茶の會より日暮
家中國中の難義を露もあまじゆに仕置ハ家老の陶尾張守晴賢よ
性せしむるを尾張守二心を持まじゆにあり毛利元就是を察し或

夜密に義隆の前より出て古より國を奪ひしこと其家の家老より
 ていそき故明君のよき家來を引まかり威を家老に奪りまじひ威を
 家老に奪りまじひてい役義を言付知行をやりて其主君よりの下知
 と存せざ家老より取まじひに心得ゆえ其主君のあまきとも無
 ごとくい家老役人の勢次第は強くありて後其主君を殺し國
 をも奪ひし今の様子危くは間御心を付らまじくとやたまひしこと
 義隆合点多く遂り尾張守を殺さたまひけり案ぶるは是は乱國の
 世のことより太平のとき君をさし奉る事はさけまじとも主君を
 して其威を奪ひ取り家老用人の常のことありまじとも熊澤助右門
 後了介 新太郎様の御時執政よりが常に入し語りてまじ今
 大名の家老用人はたままじ我國のい家老用人の物とあるをまじ

下下の敬ふと能くしつてたままじりし事少しあま下下の情露を
 りと心付多く何十万石の身上より國を持しつて有るべし
 語りしより智者のこと何れを違ふべき思ひ當まる世とありぬ
 らを悲しき

○

稲葉伊豫守一徹織田信長に從ひしこと信長心解を教寄屋より
 茶を賜り其席より刺殺さるし巧あり一徹教寄屋に入る時相伴
 の三人挨拶し掛物の繪比讀を讀なまるといふ是は韓退之の詩を
 雲横泰嶺家何在雪擁藍關馬不前といひ句あり一徹少し學問あり
 て讀りし相伴の心と問ふ一徹あま子細とありしゆえ信長
 壁越し是をきつて走り出て一徹は荒勝負をうりたる勇士と思
 ひ今聞く處文學も達せり奇特の事感する餘りし語るべし

今日のむくも茶の湯にあつて其方と刺殺さんとせし巧なり相
伴の三人皆懐剣と差し今日より永く我に從ひて謀とせしきよ
ゆりて害心を止しと云ふ事なれば三人の相伴懐より小脇差を取り
出さ一徹平伏して死罪と御免下さるひこと忝ひ私に内々今日殺さ
べきとみえんと察しやひつゝ詮方多く是非一人相手を取やと
存用意仕ひとく是も懐剣をさし出して信長に見せしめしは信長
しゆく其心づかひと譽らるるなり
○
青蓮院の宮より幼き宮方より中院前内府通茂公御後見より或時
持碁盤のあつて見て家司坊官と呼く何とてやうの事とてき物
と置けりどもさき業の本よりあはれはけはたしひ有て御年やま
この後御心付く止事もあつたなり是等ハさして悪事とあつた

其事より空しく月日を過し御学問の御志念の事
ありきりのうると云せけり誠内府公の詞尤至極なる事なり又
或とき其宮へ出入する者尺八の名高きを御目よりけり大事の器
て折紙など付らるる所へ内府公御入有て是れ誰が業ぞらるるの
事の御目よりける事やあると云まはし柱に打ちて碎く事なりその
後尺八の主参りけり其よりを語りきり返さく宝物打碎られ
けること氣の毒なり坊官あつて云はし尺八の主少も苦しむを唯
私の持し内府公のまじり召せん事恐し御聞さき私に仕
合ありとやけりども其子通躬卿も嚴ある人なりあつてけり人の後
見より人をはげ度とてあり豊臣秀頼と東照宮御對面の後本多
佐渡守正を召く秀頼はくさき人なり中々人の下知を受べき人

あぐだ父太閤の跡を継ぐんと驚きなまひて上意あつけり正信承り
りや私さうり事さう秀頼卿と愚さる申さんさうと安き事さ御
座はとすて退出しり秀頼卿の御臺所の將軍様の御娘さあ
まけきを佐渡守御臺所の上臈女房さ對面さまさ上下さ
女の嫉妬とあさきさの至極とせり秀頼卿の日本の主さ御座は
へが御召仕の女房大勢さくや不叶ささう何とぞさ秀頼卿の御
男子御誕生さ豊臣家の御血脉御相續さあさ願入所さ
必美人と撰さ出さあさ御傍さ置さまさ嫉妬さる人あさ女とを
りさ我等科さ申行ささと同く云含めけり又秀頼卿の近習は
面々さ逢ひく御賢く御座さ事大御所殊の外悦さ御座は
常々猿樂と御慰さあさ少々の間も御油断さ御くり御座は

やうさあり度は御養生第一のさ御座は唯今御年若さ何り
と御心労の事さ鬱症と御煩ひさ此段氣の毒千萬さ御
座はゆり御仕置の事さ御心とけささ猿樂さ
誦舞さ御養生第一さ然るさ身さ大切さ云
あさ皆尤とさ請さ秀頼卿色さ耽り猿樂と好さ
きの事毛頭も知りさや下の情さ夢さ合点さ
へさ終さ滅亡さ蘆田矢倉さ自害さ日本の主と矢ひさ
れさ本多正信の謀さ秀頼卿の中院内府公のさ人後
見さ木多サ謀とさ此事さ今太平の世さ敵國
より大名と愚さ非さ今この大名を皆家老と初さ重
き用人のさ愚さ事さ其子細さ主君下の情を知

り能く人と用ゐるなまへに己が恣ある事難き故にうもしく主君
と思ふもをたまへて明暮心の中願ふことと和漢同なりとぞ
ある此所より大名の辨へ知し召さん入るたまふ事とぞ
〜〜

○ 井伊掃部頭直孝大坂冬陣の物見二人とやる雨濡て帰りけきん様
子と聞て後則着らるゝ小袖二ツと脱て兩人より安藤
帯刀直へ小袖をもらひ遣し我等のこゝろ着るもの二ツ
あが家來の遣し着替無之ひと帯刀の贈らるゝ小袖を着て
華袴くわばこ東照宮の御前へも度々出らるゝと今世を以て見
まは三十万石の身体よく着替のあつてりつち事と不
審しんする人もあつても大様其節のちりさま如此より東照宮

大阪夏の御陣の御旅所御用意のこゝ仰出さるゝ膳米五升干鯛一
枚味噌鯉節よく事足るゝ味噌も多く持たると上意有之ゆ
らうすなけ武備の曾て以てま行きま事あるゝ掃部頭
やうの質素よりけきん彦根の湖上より船を都へゆ便より
しと太平の後の彦根の士ども大驕り風俗あつて衣服美麗
ありと掃部頭儉約よりまき道と積り江戸より帰る時木綿の
衣服と供の士の教をど用意彦根へ到着の朝能くく與へく
着せらるゝ彦根の家中旦那と待受し着るゝ迎へ出けり
供の士一同木綿より不審する所旦那掃部頭より木綿
らうと見く己が身を顧りつちの衣服引さるゝ心地よく

よう入質素一成けりとも國清院様村々庄屋一高一石一付米二升
づ免ゆるひ〜年号月日堀甚五兵衛殿と御自筆一遊をきき
〜と今其家一持傳〜百万石の御身の上〜てりありけん事
怪しきものことあるも是は戦國の時ともぞ〜新太郎様〜の竹と
裁く杭一せよ何村比種米のうり〜何の役〜せよと云類
御自筆一遊をきき〜御書の予が曾祖父一下さき〜数十通箱一
〜ち〜傳〜今〜の事を郡代も知ざる体多〜衰〜世の
よりき〜太平久〜乱と忘〜人々油断一暖あ〜士
の風俗以ての外〜明暮酒〜茶の會一無益の費〜川遊
物詣一日を送りて礼義の方〜心〜付む馬具〜多〜ん
と知を多く町人の家一質一遣〜物語〜きり〜女色の戯

言〜士の道〜語り出し〜又儉約一事〜利欲一
恥りあ〜むき事〜恥とも思〜親族朋友の難義と救ふ
心も〜人の物を借〜返も事を忘〜類口惜き世のあり〜あり
但〜此事の士の上〜非むす〜天下の人を四ツ〜ちて
士農工商とま〜事〜古より定〜其重き士とあ〜
持た〜を大名と〜事〜天下の貴人〜大名〜お〜
然〜今の大名貧乏〜買〜物の價とや〜國中の士民
の艱難と救〜四民の中比第一の下劣の町人を頼〜金銀を〜
〜漸々取績た〜口惜き〜の至極〜天下の貴人〜
天下の賤〜町人〜手とさ〜彼等〜料簡〜身
体と持た〜〜や〜世の〜成〜

是を恥とも思つたわつてまはばばとてうききはくぐ思慮ありま
さ大名の恥辱此上やあつてききま古より質素を能く奢
ちりきとてさき故ある事あつてや

○新太郎様常々御意あるまはば家中國中を能治んとする威と思
の二つあるべし威あつて恩あつてあまやあつて子の教訓さ
うぬびとて用ゝ立べうが又威をりて厳しきを第一とせ上
むきよ納得とて眞實なるま非は是又散々の事あり
恩よくあつて法度の少くも崩さざる如く賞罰を行ふを威とい
べし恩信あつて威も無用のことあり威あつて恩信も用ゝてむ
然もとも畢竟の所は能下の情を知ると大事なり下の情を知ま
を恩信も威も用ゝ立まきと免るも角も聖賢の教を稽古ま

この此一事の知りくつと仰あつてとあり

○前橋の城主酒井雅樂頭清佐藤五郎左衛門直方と殊の外崇敬よく

客人のたつてあつて或時五郎左衛門井伊掃部頭のりて招請せ

ら未だ掃部頭對面したるにさうち家老用人物語りける時五郎

左衛門申けり大事とすりのり勿論少りのり傳授稽古

と申事御座ひて師匠に便りて習ひ受其上を工夫を盡してやう

と合点参るりのり日本うての至極大切の事傳授もよく稽

古とよく自己の分別よく増を明ひると有之は各達御存ひやとい

家老どもはや皆々不存ひ如何と問ひま其時五郎左衛門さきを

事よく一國の仕置よく数万の士民の一命よく候大事よく安

危の至極よく夫も異國よく聖人賢人の教あつて詞萬世の

鏡より道と稽古し今之君臣より此稽古より自己に
分別して時を明らむは危き事の至極と語りけり

常山紀談附録終

明治十二年一月二十七日 出版

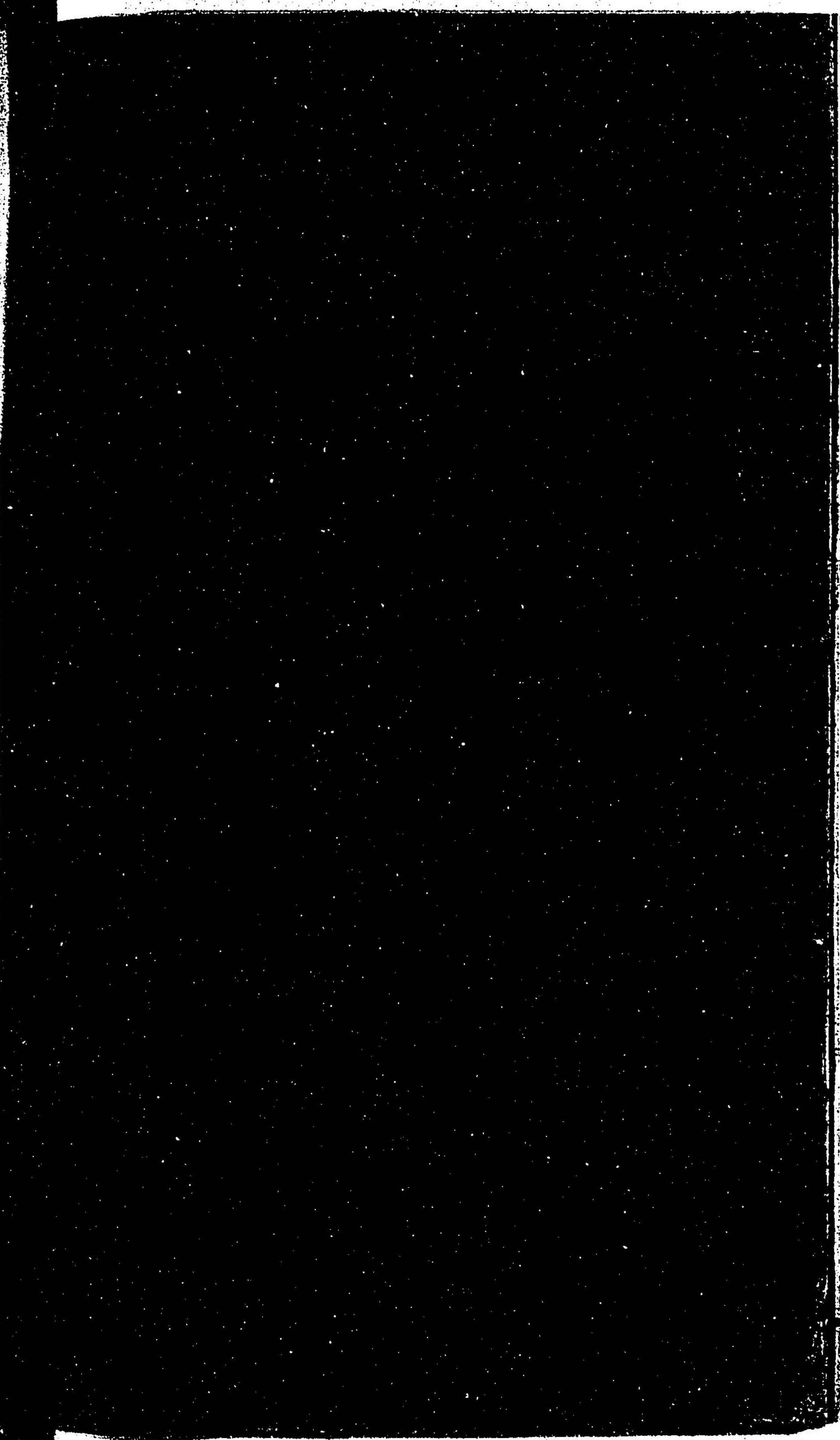
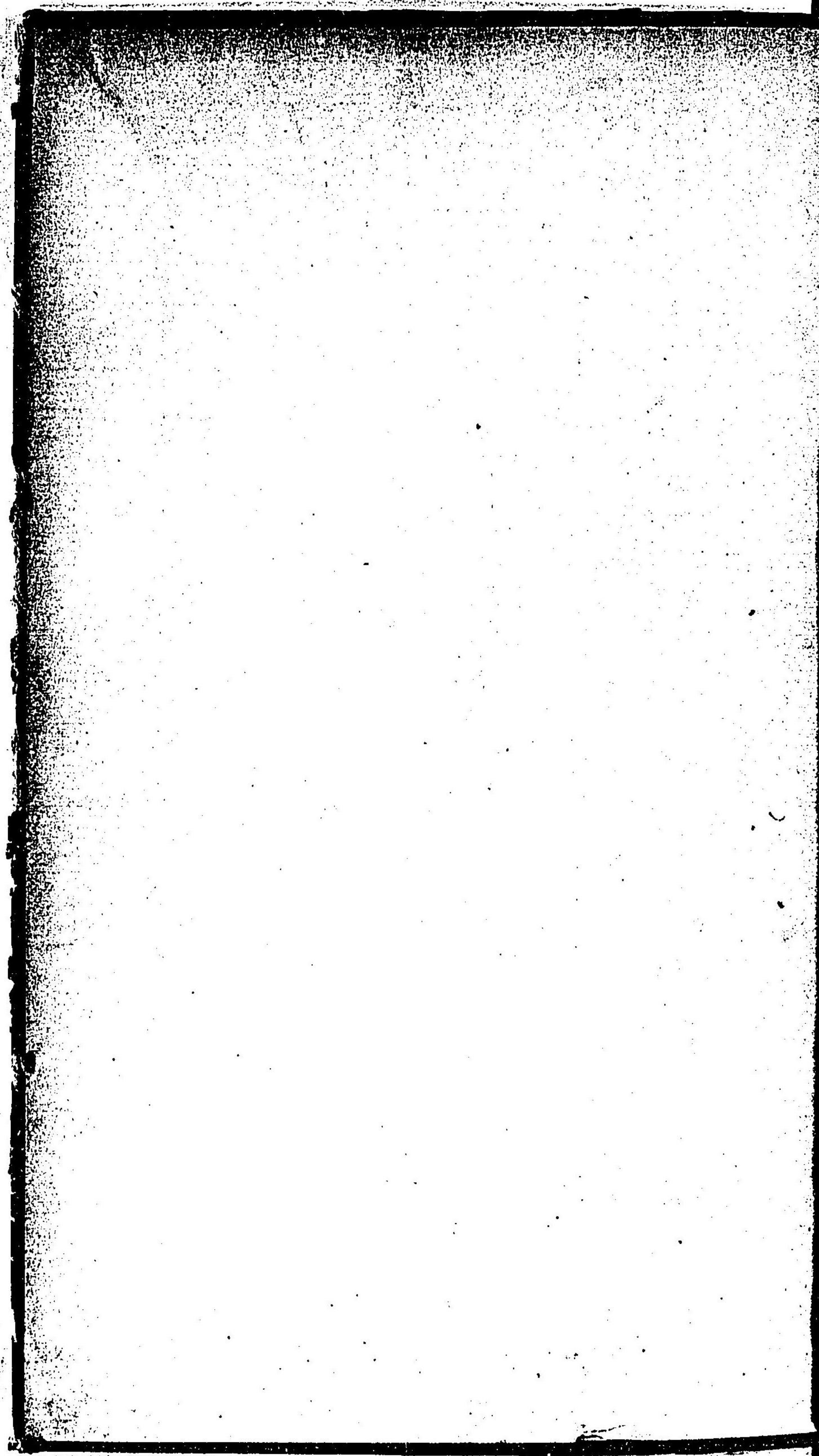
出版所

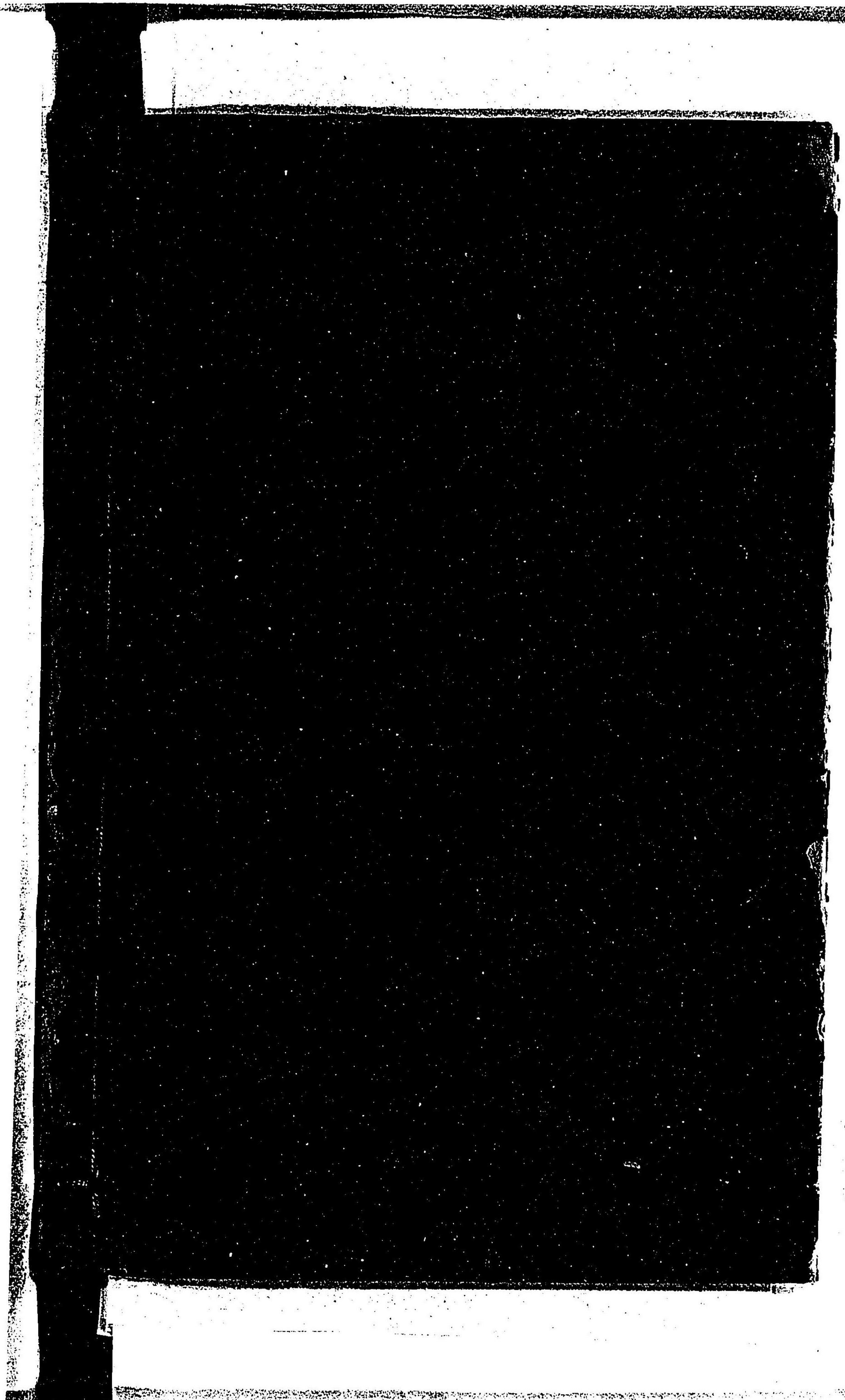
東京元數寄屋町貳丁目六番地
内外兵事新聞局

發兌書肆

東京日本橋通三丁目 稲田佐兵衛
同 小林新兵衛
同南傳馬町三丁目 小林新造
大坂心齋橋通久太町四丁目 柳原喜兵衛
同心齋橋通唐物町四丁目 淺井吉兵衛

135
15
116





185
8
116

山紀談

十四